

# 寝取られ ネネさん その 3

～日常も旅行中も、  
中年オヤジに寝取られ、  
開発され続ける彼女～



※前回(その1, その2)までの寝取られネネさん

彼との熱海旅行で毒島に処女を奪われてしまった寧々は、絶望も冷めないまま、デキシーズで行われている不審な出来事に気づき、自身で調べ始める。

後輩の身に危険が及んでいるのかもしれないのだ。

いやな予感はある中し、同僚の尾鳥と小毬は裏営業として、客たちに体を売っていた。

店の売上は上がっていたが裏があったのだ。

助けに行こうと店に飛び込んだ寧々は、裏営業の客に勘違いされ、あわや抱かれるかと思いきや。

毒島が現れる。毒島が裏営業に噛んでいたのだ。

だが、客たちは寧々を抱けるとして騒いでいる。事を収束させるには、毒島が抱き続けるしか無いという。



他の知らない男達に抱かれるよりは。  
抱くのが世界一嫌いな男でも。  
寧々は、毒島に再び抱かれてしまう。

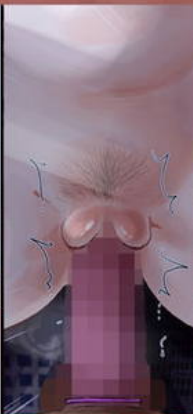
毒島の圧倒的なテクニックと、  
観客達の前でのセックスという羞恥。

ショックを受けた寧々は、  
やはり汚れた体でも彼に抱かれようと、  
××と仲直りして再び熱海へ…。



××はついに訪れた寧々との  
セックスに大興奮。

クニニや、おっぱいを存分に  
揉んで楽しんで、夜2回、  
朝1回のセックスを堪能する。



だが寧々はすでに毒島に  
散々抱かれた体。

あの日は13時間、12回も  
抱かれ続けたことを  
まだ××は知らない。

知る由もない。



彼氏である××との幸せなセックスの後日。

下校中、槍沢に連れて行かれた  
レンタルルーム。  
やはりそこで、寧々は客たちに抱かれるか  
毒島に抱かれるか選択させられ…。

またしても毒島との濃厚公開セックスへ。

寧々は毒島にまたしても朝まで  
たっぷり抱かれて、  
膣内にこそ出されていないものの、  
精液を体中にぶっかけられて、  
さらなるエロスの渦に飲まれて  
しまっていた。

寧々は毒島の車で家まで送られている。  
空はどんよりと曇っていた……。

(ここまでのあらすじ・終)



# 寝取られ ネネさん その 3

～日常も旅行中も、  
中年オヤジに寝取られ、  
開発され続ける彼女～



「まあ、とりあえず売り上げも上がってきてるし、  
あと1ヶ月くらいは我慢して  
おじさんに付き合ってよ。」

帰りに送られる車中で、寧々は毒島にそう言われた。

あと1ヵ月。ちょうど寧々も引き継ぎも兼ねて  
バイトを辞めようとする時期だ。

あと1ヵ月我慢すれば終わる。だが逆に言うと、  
あと1ヵ月も大嫌いな男に  
抱かれ続けなければならないのだ。

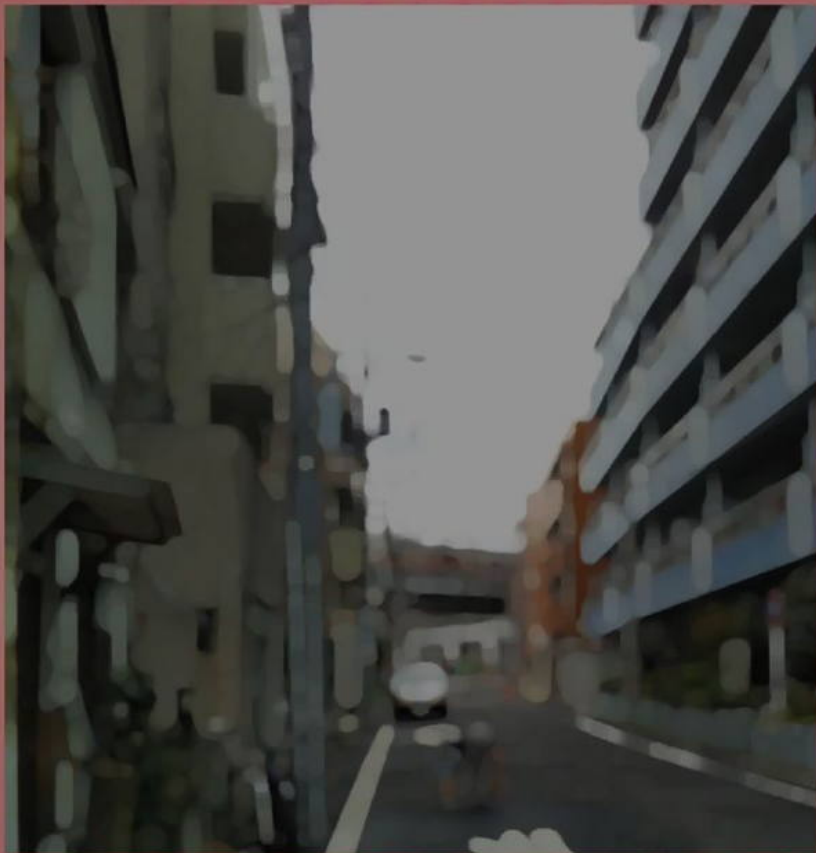
毒島久仁彦はとんでもない絶倫。  
一度セックスを始めると  
何十回も絶頂させられてしまう。

しかし寧々は密会を断る事も出来ない…。





悪夢のような情交の翌日。  
寧々は、彼氏である××の家に向かった。  
毒島との悪夢を一時でも振り払うために。



部屋に着くなり、寧々と××は激しくキスし…。


「寧々さん」  
「脱いで…っ♡」

「んぐっ♡」

寧々は、××をベッドに押し倒し、  
騎乗位でセックスを始めた。

「挿れるね…♡」  
「うああ…寧々さん…♡」





「あぁっ挿入った…♡」

「んっ♡」

寧々が積極的に挿入した  
膣の熱さに興奮する××。

そして強くキスを重ねる寧々。  
「寧々さんすごっ 積極的…っ」

「んっ…♡んうう♡」

寧々とのキスに夢心地な××。  
ゴム越しとはいえ寧々の膣に感激する。  
二人はそのままキスしながら抱き合う。  
絶対に毒島にはしないキス。

彼のためだけのくちびる。  
寧々是最愛の彼氏と  
キスを沢山しながら  
お互いの愛を確かめ合う。

「ねえ…幸せ…♡」

「僕もだよ…寧々さん」

「ああ♡寧々さんのまんこ♡」

「んっ♡ふー♡ふー♡」

寧々は、串刺しになったペニスに物足りなさを感じるも、溢れる彼への愛情に心が満たされる。

「動く…ね…♡」

ああ♡  
きもちいい♡  
…っ♡

ズググ…♡  
みち…♡  
みち♡

はあ♡ああ♡

もにゅ♡

たはぶ♡

「ああ♡積極的な寧々さんも素敵だよっ♡」

一時間後。

「ね…寧々さんエロすぎっ！うおおお…」  
すでに××は2回射精させられていた。

「はあ♡はあ♡欲しいの♡  
もっと貴方が欲しいの♡」

「あ～おっぱいエロ過ぎる♡  
柔らかくて重いつ♡  
こんな可愛くておっぱい大きい  
彼女とエッチ出来るなんて♡」

「はあ♡もっと動くね…♡」

積極的な寧々に  
××は興奮が止まらない。



10分後。

「もうヤバイって…！また出るっ！」

寧々は、××がせいぜい3回が  
限界な事を知っている。  
まだセックスして1時間強。

「待って…まだイカないでっ…  
まだ足りないっ…」

「でも…寧々さん気持ち良すぎて…」

ぬぁっ！  
気持ちいい！  
出るっ！  
出っ…！

ぬち♡  
ぬち♡

ヌッ♡  
ヌッ♡

もっ♡

ムニゅ♡

ほゅん♡

もっ♡  
もっ♡  
もっ♡

「待ってえ…もっと欲しいっ…！  
もっと我慢して…」

5分後。

「もうだめだっ！もうイクっ！  
もう出るよっ！寧々さんっ！」

「待ってえまだ駄目え♡  
もっと繋がってたい♡」

「あああ寧々さんっ…！  
もう出るっ！出るううう！」

「あああ待ってえ私も  
イクらううう♡あああん♡」

出る！  
出る！  
ネさん出るうう！！

ぬるっ♡  
ぬるっ♡

あ♡  
あ♡

あ♡  
イク♡  
イク♡  
イク♡

イク♡  
イク♡

ちゅ♡  
ちゅ♡

モニ！！

汗ばんだ寧々の豊満で迫力ある体。  
色香を撒き散らし、甘い吐息を  
彼の体に吐きかけながら、絶頂する。

「うおっ！お！うおおおお！」

「はうっ！あっ！あああああんっ♡」

「ああ寧々さんっ！寧々さん♡」

「ひんっ！あんんんっ！  
はううううっ！」

ああっ！

ネネさんっ！！

ビュクッ！

とびっ♡

ドクッ♡

あっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡







「はあ！はあっはあ！はあ…」  
「はあ♡はあ♡気持ち良かった…♡」

「お…俺も…♡最高すぎ…♡」  
「ねえ…♡気持ちいいね…♡」

寧々の豊満なボディが倒れかかる。  
××自身の胸の上で潰れる、  
寧々の柔らかい胸の感触。

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

たゅん♡

ゅっ♡  
ゅっ♡

ゅっ♡  
ゅっ♡

びくっ♡  
びく♡  
びくっ♡

改めて、こんな美少女とエッチ出来る  
幸せを噛みしめる××

「ねえ…まだ出来る…？」

「え…？」

「もっと…あなたと…」

「ちょっと今すぐは…さすがに」

いくら寧々相手とはいえ、3回出して、  
萎えてしまっている××のペニス。

「そう…。」

十何回も連続で出来る  
毒島が異常なのだ。

でも寧々は幸せだった。



「…ねえ、旅行。楽しみだね。」  
「もちろん。」

「うふ。あなたとこんなに  
旅行行けるなんて幸せ…」

××と寧々の二人は、月末に箱根への旅行を  
控えているのだ。  
またしても旅行券が当たった。

「あなたと2人きり…♡」  
「寧々さんと二人きり…♡」  
「もう、幸せだからって真似しないの。」



××は、またしても旅行でセックス出来ることに胸を高鳴らせて股間を膨らませていた。ドキドキしているのは寧々も同じだった…。結局入浴後はそのまま眠る。

起床後の朝、もう一度セックスして二人は一緒に登校した。

だが、それは束の間の幸せで…。



翌日、水曜日。寧々は××との週末の遊園地デートを断らねばならなくなった。

「土曜日、日中空けといてよ。  
姉ヶ崎さんの部屋、掃除しておいてね。  
お母さんはパートに出てるよね。」

毒島からそう言われてしまったのだ。  
背筋が凍った。  
(まさか、この人、私の部屋に来るつもり!?)

だが、寧々は断る事が出来ない…。

「うちに…来るんですか。  
ホテルとかじゃ…駄目ですか。」

「うほ♡姉ヶ崎さんにホテルに誘われるなんて♡  
でも駄目。姉ヶ崎さんの家に行くよ。」

「……わかり…ました…」



インターホンが鳴る。寧々は玄関のドアを開ける。

「お邪魔するよ」

「こんにちは…」

毒島が、居る。

この世で一番嫌いな男が、自分の家に。

「お気遣いなさらず。」

廊下を歩き、ズカズカと奥へ向かっていく毒島。

「部屋どっち？」

案内もしたくないのに。二人は一緒に廊下を歩き  
寧々の部屋の前へ。毒島に促され、  
寧々は渋々、自分の部屋のドアを開ける。



部屋に入るなり、寧々の体を触り出す毒島。  
勃起した股間を押し当てる。

**「あれえ？もう濡れてない？」**

「濡れてません」

寧々のスカートに手を入れ、  
ショーツ越しにまんこを触り出す毒島。

ペニスを押し当てながら、おもむろに服を脱ぎ出す。

まだ男性は父と彼氏の××しか入れた事のない  
神聖な部屋。だったのに。

気がつく、小汚い中年男が全裸で  
ばかでかいペニスを勃起させて  
服を脱ぎ捨てていた。

すでにカウパー液が鈴口から溢れている。

**「ここが姉ヶ崎さんがいつも寝ているベッドか。」**

毒島は裸のまま、寧々のベッドに倒れこんだ。



「うふふ、姉ヶ崎さんの匂いだ」

毒島は寧々の枕を嗅ぎながら、  
信じられないことに、  
ペニスをシーツになすりつけ始めた。

「うふふ。姉ヶ崎さん…♡」

そのおぞましい光景に戦慄する寧々。  
全身に鳥肌が立った。

これから、こんな気持ち悪い男に抱かれるのか。  
まだ彼も寝かせてない自分のベッドで。





「さあおいで。可愛がってあげよう。」

フル勃起したペニスはシーツに、  
先走り液の糸を引いている。  
毒島が両腕を広げて寧々を迎え入れようとする。

「じ…自分で脱ぎます。」

「うほ♡服を脱いでる女の子を見る  
ってのも良いもんだよな♡」

毒島は、再び寧々の布団にペニスを  
擦り付けながら寧々の脱衣を見る。

「それ…やめて下さい」

あまりの嫌悪感に警告する寧々。



「僕の匂いを姉ヶ崎さんのベッドに  
いっぱい付けておきたいじゃない。

まあこれから8時間はセックスするから、  
このベッド、どっちにしろ  
僕の匂いになっちゃうけど。」

(8時間…。  
今、朝の10時だから、夕方まで…。)

わかってはいたが、  
その時間の長さに恐ろしくなる寧々。

××君は連続でも2時間いかないのに。  
毒島なら余裕という恐ろしさ。



寧々が、部屋着のパーカーと靴下を脱いだ時点で毒島が脱ぐのを制止した。

「待つて。やっぱり自分で脱がせるわ。  
部屋着のままおいで。」

部屋着のままハメたいわ」

「……変態……」

「さあ、おいで」  
「……………」

寧々は無言で、自分のベッドに横たわる  
不快でおぞましい男の胸に、抱かれに行く…。



「かわいい部屋着だよねえ♡  
いつもこれ着て彼と  
イチャイチャしてるのお？」

「んはあっ…やめっ…  
やめてくださいっ…！」

毒島は部屋着のショートパンツに  
ペニスを擦り付けている。

あ…あぁっ！

「ブラ付きのタンクトップか。  
便利な時代だよねえ。  
|カップのやつなんて売ってるの？」

「細かく聞かないでくださいっ…！」

「まあいいや♡脱がせて  
爆乳あらわにしちゃお～♡」

ゆしゆし

すり♡

ビキ ビキ…♡

「おほお♡出た出た♡  
姉ヶ崎さんの爆乳♡でっかつ！  
【カップ半端じゃないねっ！】  
「ん…うう…」

「乳首もぶっくり  
パフィーニップルで  
エロすぎじゃんっ♡」

「おほお♡  
出た出た♡  
爆乳♡  
でっかつ！  
【カップ半端  
じゃないねっ！】  
「ん…うう…」

But even so

「揉みまくって舐めまくって  
吸いまくってあげるねっ！！  
「あっ…ん…あああ…！」

「っあはああぁっあああんっ！」

「うほおっ♡良いっ♡良いよお～姉ヶ崎さんっ！  
この締りのいいJKまんこおっ！！」

毒島の巨根が寧々の膣奥まで貫く。  
「…っ…すごっ…！」

はあまあまんっ！！

ずほおっ！！

寧々は思わず声が漏れてしまう。  
硬さ、大きさ、太さ、テクニック。

どれも彼のペニスとは比べ物に  
ならない。

「ん？なんて？凄いて？」

「…っ…！言ってませ…  
んんっ…！ああぁっ！！」

ふんっっっ

3時間後。すでに5回戦が経過。

「せっかくだからさあ〜♡  
この箱使い切るまでやろっか♡12発♡」  
「ひゅうう…！何でこんなにっ…あう」

「いつも彼氏クンとこの部屋で  
イチャイチャしてるの？  
今日はおじさんとズコパコしてるけどね♡」

はぁ  
はぁ  
はぁっ！

ふん！

ふん

めち  
めちっ

「あああああ…言わない  
でえええ…！！あうっ！！」

「そうだ♡彼氏クンにもらった  
チョーカーとかネックレスとか  
着けてセックスしてよ♡」

キョッ キョッ！！

「そんなの…絶対いやああ…！  
ああああ…！！」

さらに4時間。

「うふふ♡いけない子だね♡  
彼氏のプレゼントまみれのカラダで♡  
自分のベッドで♡彼氏じゃないおじさんと  
もう11回もセックス重ねてる♡」

「それはああ…毒島さんが無理やり…  
ああっ！はうろうう！」

ベッドの上には、射精済みの  
コンドームが散乱している。

「ああ～♡可愛いよ姉ヶ崎さん♡  
こんな汗だくで♡髪を乱れさせて♡  
ボクの腕に抱かれてる♡  
彼氏じゃないおちんぼ飲み込んで♡」

「あああああ…言わないでええええ…！」

（ああっ！はっ！はあっ！）

（ざん）

（おん）

77°♡ 77°♡

427°♡ 427°♡

ぐいぐい！



「あうっ！ひううっ…  
そこだめえええ…！」

「もう姉ヶ崎さんの弱点、  
完全に把握しちゃってるもんねえ♡  
何なら僕が毎回追加してるしっ♡」

「もっ、もうだめええええ！  
そこだめっ、ひっ、ひいしいい！」

「姉ヶ崎さんがイクなら一緒にイこうか♡  
今日12発目のっ姉ヶ崎まんこ射精っ♡♡」

「そこっ…やめてええ…ほんとにっ…  
弱ああああああっ…！！」

「ああ姉ヶ崎さんのまんこ震えてるっ！  
キュンキュンしてるっ！イクよお！  
このスケベまんこでビュドビュ  
しちゃうよおおお！♡」

だめええええっ  
えっ

ひん  
なっ

ん  
ん

ん  
ん

「っあああああはあ  
あああっ！あああああ！」

「おふっ♡おとおお♡12回出しても  
気持ちいい♡めっちゃちんぽ  
搾ってくれるよおお！」

「あうっ！ひょうう！そこっ…  
突いちゃ駄目ええ…！！」

「あ～♡あ～♡射精気持ちいいっ！！  
開発すればどんどんエロくなるっ♡  
ただでさえドスケベなボディしてるの♡」

どろろ♡  
どろろ♡

「あっ…！あっ…あっ」

「明日は彼氏クンとデートか…仕方ないね。  
まあまた平日も来週末も声かけるよ。  
おじさんと濃厚なセックス、またしようね♡」

「う…ううう…うう…はい…」

「あ～♡まだまんこキュンキュンしてる♡  
時間さえあれば朝までおまんこしたいんだけどな～♡  
まだ何回もおじさん出来るよお～♡」

「う…ううう…」

はぁあ！ あ！

あっ…！

改めて毒島の絶倫ぶりに驚愕する寧々。

そして気がつくと、散乱したコンドームの数と、  
漏れ汚れた精液、毒島の男臭い匂いの充満に絶望する。  
自分の愛液のスケベな匂いが漂う部屋にも。

びゅぷん♡

ドク…♡

ドク…♡

寧々は、毒島が帰宅した後、  
部屋の掃除をしなければならなかった。  
毒島が手伝いを申し出たが、早く部屋から  
帰って欲しかったので追い出した。

8時間ぶっ続けのセックスで、大量の精液、  
自分の愛液が付着した布団を取り替えなければ  
ならなかったし、その男と女の濃厚なセックスの  
匂いを除去したかった。

なぜ、自分の部屋で大嫌いな男と  
8時間もセックスを…。  
しかも寧々が一番悔しいのは、そのセックスで  
乱れに乱れてしまった事。

まんまと毒島のセックステクニックに  
酔わされてしまった事。

寧々はなおも女性器を濡らしながら、  
セックスで火照った身体のまま、  
部屋を掃除し始めた…。



翌週の火曜日は、祝日だった。

××は、寧々の部屋に来ていた。

久しぶりに部屋デートしたいという  
意見が合致したのもあるが、  
目的はもちろんセックスするため…。



寧々の部屋でイチャつく2人。

初めはゲームをしたりホラー映画を  
観たりしていたが、

我慢できずにどちらともなくキスして、  
そのままベッドへ…。



先週の土曜日、このベッドで  
大嫌いな男と8時間セックスした事実。

その事実を払拭するように、今寧々は  
大好きな彼氏と熱くキスをしている。

「大好き。あなたの事…本当に大好き。」  
「俺もだよ…！ 寧々さん」

「大好きだよ…ずっとそばにいて…」  
「当たり前だよ…ずっと寧々さんを、  
離さないよ…！」

「…セックス…しよ…？」

生唾を飲み込む××。  
そのつもりで来たのに、  
この言葉の破壊力。

すぐに、服を脱ぎ出す2人…！





そして…

寧々の部屋着を脱がせた  
毒島は、擦り付けていた  
ペニスにゴムを装着し…。

「ひあうっ！！」  
寧々のまんこに一気に  
奥まで挿入した。



寧々のふわふわの身体が密着する。  
甘い体臭、肌に触れる寧々の陰毛。  
熱い吐息。甘ったるい声。

「はあっ…！気持ちいい…寧々さん…」

「私も…好き…好きいい…」

ちゅっちゅっちゅっちゅと  
キスしながら、  
対面座位でセックスする2人。

「寧々さん…大好きだよ…」

「私も…♡この時間が一番幸せ…♡  
人生で一番…♡あなたを  
一番感じてる時間…♡」

キスしながら、優しく  
セックスを続ける2人。

快樂のみを追求するような毒島の  
ねちこいセックスとは対照的な、  
愛情のみを追求するセックス。

「あぁん♡もっとくっつきたい…♡  
あなたの一部になりたい…♡」

「寧々さん…♡もっと  
寧々さんとひとつに…♡」

「あなたの事もっと知りたい…♡  
あなただけの寧々だから…♡」

「あぁ～寧々さん♡  
寧々さん…♡愛してるよ…♡」

「私も愛してる♡」

ちゅぽっ♡

ちゅっ♡

ムキっ♡

がし！

みち♡

ぬち♡

ん♡  
木女子っ♡

愛してる…♡

♡

♡

30分後。

「ああ♡気持ちいい♡  
寧々さんとの  
セックス♡最高…♡」

「私も…♡すごく気持ちいい…♡  
心がつながってる気持ち…♡  
一緒になってる♡」

「寧々さん…寧々さんと…  
体だけじゃなくて…  
心でも一つになってるね…」

お互い愛し合ってるゆえの、  
精神的な結合。

それは毒島とのセックスでは  
決して感じ得ない快感…。  
愛し合ってる2人だけの…。



「ああ…出る…出るよお…  
寧々さん♡幸せすぎて…  
出るよお♡」

「私も♡幸せで♡こんな気持ちよくて  
♡ああ♡あなたの事大好き過ぎて…  
本当に気持ちいい…！」

「ああイクっ、イクよお寧々さん！  
ああ出るうあ…」

「ああ私も、あっ、  
あ！あああ！」

イクっ♡  
んん♡  
私も♡  
気持ちいい♡

じゅぽっ♡

ちゅっ♡

ちゅぽっ♡

ちゅっ♡

アッ♡

アッ♡

「っ…!!!!  
くううう…！」

「あ……………!!!!」

大きな声こそ出ないが、その快感は、  
肉体的な快感とは全く別の、  
精神的な快感を伴っていた。

お互いを愛するからこそその快感。

「ああ…！あああ…♡♡♡」

「んん♡♡……………  
…っ……………ん♡」

ふるふる！

びくっ♡

びくっ♡

とびくっ♡

とびくっ♡

♡♡

「はあ…はあ…寧々さん♡」

「ああ♡幸せえ♡  
こんな…気持ちいいなんて。」

寧々の頬をつたう涙。

「寧々さん♡俺も本当に  
気持ち良かった♡すごく幸せだよ」

「私も…こんなセックス…  
知れてよかった♡  
…大好きだよ♡××くん♡」

「寧々さん…愛してる♡」

ん♡ん♡

幸せ♡

大好きよ♡

♡

ち♡

ち♡

ち♡

ん♡

ど♡

ど♡

ど♡

このセックスが幸せすぎて、寧々と××は、この一回で、あとはベッドで添い寝していた。

こんなセックスが出来るなら回数など関係ない。  
毒島とのセックスなんかよりよっぽど気持ち良かった。

たとえ絶倫で、何回セックスを重ねられても絶対彼とのセックスには勝てない…。  
寧々はそう思って、××の腕で眠った。

そう。精神的なつながりがあるセックスに勝るセックスの快感は無い。

**だが、もし圧倒的なテクニックを持つ毒島と精神的なつながりを持ってしまった場合の快感は…？**

その恐ろしさに寧々はまだ、気づいてないし、予想もしていなかった…。



翌日。水曜日。  
寧々のスマホに毒島から電話。

「姉ヶ崎さんの彼氏クンさ、  
今週末、部活の合宿なんだろう？」  
「え…なんで知ってるんですか」

「こんどテニス部のボランティアコーチ  
始めるからね。情報が入ったんだ。  
まあ僕は合宿には行かないけど。」

「それでき…」

「…はい。」  
「彼氏クンの家の合鍵、持ってるんだろう？」

「……持ってません。」

「彼氏クンの家、入らせてよ。」





寧々は脚が震えてきた。

(この人は何を言ってるんだろう。  
なんでこんな恐ろしい事を  
言えるんだろう?)

「合鍵持ってません。」

「じゃあ明日の午前10時、  
小さい公園で待ち合わせね。」

そのあと案内して。大丈夫。  
代わりに布団とか持って行くから。」

(全然大丈夫じゃない。  
セックスを、するつもりなの?  
彼の家で!?)

…怖い。この人が、本当に、怖い。)

でも、寧々が断る事は、出来ない。



土曜日。

「合宿、行ってくるね」

寧々は朝、××からメッセージをスマホに受け取った。  
寧々の心は罪悪感と恐怖でいっぱいだ。

彼の部屋が空いてしまう事を告げられたのだから。

……そして、今からそこで、

世界一大好きな男のベッドで、  
世界一嫌いな男と、  
セックスすることになるのだから…。



小さい公園で、大嫌いな男と待ち合わせ。

公園に停めてある毒島の車。  
後部座席には布団。

### 「案内して？」

毒島は既にズボン越しに勃起している。  
寧々はわざと間違った場所を案内しようか、  
とすら思う。

寧々は絶望しながら、  
一番案内したくない男を、  
最愛の男のプライベートスペースに案内する…



大好きな彼の匂い。彼の部屋。  
そこに、大嫌いな男が居る。  
あろうことかそんな男を案内して引き入れた。

「よし、ちゃんと写真とって、  
元の位置に戻せるようにしないとね。  
なんだか殺人事件の犯人みたいだな。」

犯人だ。犯人には間違いない。  
この男のしていることは罪だ…。  
この男のしている事は許せない…

元に戻せるように部屋の写真を撮り、  
××の布団を交換している男を見て、  
寧々は思う。

「じゃ、セックスしようか」

毒島は服を脱ぎ出す。



あっという間に全裸になった中年男。  
見事に勃起が天を突いている。

脱ぐのを渋る寧々。

### 「ほら、脱いで」

毒島が寧々を脱がす。

勃起を執拗に寧々の体に当ててくる。  
彼の部屋で、大好きな彼の部屋で。

(彼と幸せなセックスを毎日してるのに、  
今日はなんで大嫌いなこの人と…)

手をとる毒島に全裸にされた寧々は押し倒され、  
最愛の男のベッドに、大嫌いな男に  
脂ぎった肌を押し付けられる……。




「はあっ、あああああああ！」

…午後1時。

すでに寧々は3時間、  
毒島に抱かれていた。

「ほらほらっ！ 感じてるじゃない！  
嫌がってたけど体は正直だよねえ！  
おじさん、またビュッビュしちゃうよお！！」





（彼の部屋なのに、彼のベッドなのに。  
昨日もラブなセックスをしたのに。  
嫌いな男に抱かれているのに。  
なんでこんなに乱れて…）

「おまんこすっごく締まってるよお！  
彼氏のベッドで興奮してるの？  
浮気セックス興奮してるの？  
我慢出来ね～出しちゃお！」

「違いますっ 浮気なんか  
じゃ…あああああ…！」

「んううううっ！いやっ、  
いやっああんうううっ！」

「おうっ！ほお！お～♡  
浮気まんこ最高♡♡」

「違いますっ、これは…これはあ…！」

彼のベッドでセックスしてることに興奮してるんじゃない。毒島のテクニックが圧倒的なだけ…。だが、そんな事こそ、寧々は言えないのであった。

「はは！明日は姉ヶ崎さんは  
バイトだね！今日の夜まで  
たっぷり楽しまないとねー！」



午後10時。

結局半日、12時間近く結合したままの2人。  
またしてもコンドームの箱が空になるまで、  
11発のセックスを終え、これが12回目。

寧々は数十回の絶頂で髪を乱し、  
汗だく、液だくの体を、  
寝取り男と打ち付けあっていた…。



「ねえどうなの？彼氏くんは  
こんなに気持ちよく出来るの？」

「ひぁああうっつふうう…！  
出来ませっ…すごく  
気持ち良くてえ…」

「おまんこのどこにでも届くような  
ちんぼだっけ？ほら！こことか！  
こことか！ほじくれるような長さかな？」

「そんなのっ…ひいつ…  
関係ないです…！  
彼のは…愛情があつてえ…!!」

「僕だって愛情あるよお！♡」

あっ! あっ! たぬっ!  
そこだめええっ!!

「ああっ、ああ！そこだめえええ！」

「姉ヶ崎さんがココ弱いの知ってるの  
僕だけだし届くのも僕だけだよお！」

「もっ、もうだめええ…飛んじゃうろう…！」

「じゃあ一緒にイこっ♡姉ヶ崎さんは  
今日100回目のっ♡僕は  
12回目のオーガズムだよっ♡」


ぐし

ぐしゅっ!

ドズ!  
ドズ!

ぐしゅっ!  
ばちゅっ!





「んっあああああああ  
はああっ!!!」

「おほっ♡おお～♡このまんこの締めりっ♡  
子宮口付近のカリへの絞りっ!  
あ～♡これ彼氏クンわかんねえだろうな～♡」

「ああああ!だめえええ…  
止まらな…いいいい!」

「あ～めっちゃ精子出るっ♡♡  
姉ヶ崎さんのスケベまんこで  
膣の奥から搾られてっ♡♡」

「好きだよお姉ヶ崎さん♡大好き♡」

「私は…大嫌いです…！」  
「でもすっごく感じてたよねえ♡」

「そんなの…関係ないです…！」  
「彼氏くんは届かないところ  
ほじくれるこのちんぼ、最高でしょ？」

「そんなの…ないです…  
私はあなたのこと…  
全然好きじゃないですから…！」

毒島は××の布団を元に戻す。  
服こそ着ているが、まだ勃起している毒島。

「じゃあ来週は日曜空いてるよね？  
また小さい公園に来て。」

「……」

「来てよ」

「外でするのは絶対いやです。それから…  
あなたとはこの部屋ではもう絶対いや…」

「大丈夫、今度は僕の家だから」

驚く寧々を見つめて、毒島はニヤリと微笑む…。



翌週。

毒島とのセックスが××の家で行われていた事もバレず、  
バイト終わりに、寧々は毎日、  
××の部屋に通ってセックスしていた。

××は避妊具をつけて寧々に挿入する。



寧々は、××とのセックスを繰り返す。  
このベッドで毒島とセックスを  
させられてしまった罪悪感も感じながら。

「ああ…寧々さんっ最高だよ…愛してる…  
寧々さんと毎日セックス出来るなんて…」  
「私もっ…ん…♡幸せ…♡」

「ああ♡寧々さんのおっぱいが潰れて…  
エロすぎるこんなの…  
ペロチューも出来るし…」  
「もお…心の声 全部声に出てるっ♡ちゅっ」



だが寧々は、愛情に包まれながらも、  
たしかに××の単調な動きと、決して長くない  
ペニスを物足りなさを少し実感してしまっていた。

「俺の全部が寧々さんに、  
包まれて…！」

(あんっ…幸せなのに…♡  
奥まで届かないもどかしさが…)

「寧々さんつきもちいいよ…  
全部寧々さんに包まれてる…」

(そうよね…××君のは  
これで全部入ってる…  
毒島さんだったらまだ…)

(ひあっ…ひあああ…！そこおおお！)

「ほらほらっ！ここ！良いんでしょ？  
ここの奥の所！しかも下から！えぐりこむように  
ホジホジされるのがたまらないでしょ!!」

あっ! あ!!  
あ!!

はああっ!!

ドズグッ!

ドズッ!  
ドズ!

ドズッ!

あろうことか、寧々の頭に  
浮かんでしまった毒島のイメージ。

(そうなのっ、そこ、本当に弱いっ…！  
しかも縦横無尽に動かれて…刺激されて)

「彼氏クンじゃ絶対に届かないところ！ほら！  
こんな風にこね回したりもしないでしょ！ほら！」

「ひあっ！あううんっ！！」

いいだろ…?  
奥っ！いいだろ…?

寧々の膣が一気に締まった。

「うはっ?!寧々さん?!」

「はうっ…ごめんね…  
あ…あんまり気持ち良くて♡」

「おおお!寧々さんっ♡  
俺も気持ち良すぎだよっ!  
ああもう出そう…」

「ま…待って…一緒にイこっ♡」

「ああ寧々さんっ…出るっ…  
出る…出るうう!イクっ!!!!」

「あっ、はあああああっ!  
わたしもおおっ!!」

ああ♡  
ネネさん♡♡

「はっ、あ、はあっ！はああっ♡  
ああ～♡気持ちいいいい…！！！」

「ああんっ♡はあ♡あああ～♡」

あ♡あ♡  
はあああ～♡

びく！  
びく！

びく  
びく！！  
♡♡

お！  
ああ♡  
ネネさん♡♡

とびっ！  
ゴッ！！

「おっ、お…おおお…♡うっ♡」

「はあ♡あ♡あああ…♡」

(あの人は…多分まだ射精してる…  
恐ろしいくらいの量を)

「はあ…気持ち  
良かったよ寧々さんっ」

ドロ… ドロ…

ア…♡

ドロ…♡

(しかもこの後何時間も  
続けられるくらい…  
ずっと萎えなくて…)

「…寧々さん？」

「あっ…ごめんなさい…  
すごく…気持ちよくて…浸ってた♡」

「もう…寧々さん可愛いなー♡」

はあ、  
あ♡  
あ♡  
あ♡

ネえさん♡

い…

寧々は、毒島のイメージが湧いてしまった事に後悔と驚きを感じていた。

だが、愛情や幸福度、感情的な快感でいうと××が圧倒的に上。  
しかしテクニックや持続性、物理的に与えられる快感でいうと毒島が圧倒的に上。

全く逆の快感だからこそイメージが湧いてきてしまった。  
そして寧々は毒島と会う週末を迎える。



小さい公園。  
朝から毒島に呼ばれ、車に乗せられて  
向かった先は、毒島の家だった。

家の中。

まるっきり男所帯という感じの匂い。

掃除はされているが、色気がない雰囲気。  
ここが毒島の住んでいる空間か、  
と思うと不気味さすら感じる寧々。

「上がって」



途中、寧々は毒島の息子の  
サトルと廊下で会った。  
毒島が紹介する。

「ああ、息子のサトルだ。  
一つ下で同じ高校だよな。  
でもまあ気にしないでくれ。  
サトル、部屋には入るなよ。」  
「う…うん」

「この人は俺のものだからな。」  
「あ…あなたのものじゃないんですけど…。  
…サトル君こんにちは。」

「…こんにちは。」

勃起しはじめたサトル。それを少し視界に  
入れてしまった寧々、毒島は自分の部屋に  
寧々を入れ、ドアを閉じる。





本が大量に並び、部屋は整えられている。  
しかし、いつも抱かれている時に感じる  
毒島の匂いを感じ、寧々は何とも不快だった。

ドアが閉められた。

「せっかくなら泊まっていけばいいのに」

「が…学生ですから…お母さんに変に思われるし。」  
服を脱ぎながら寧々に話しかける毒島。

「彼氏クンの家にはいつも泊まってないの？」

「…ほら、早く脱いで」

「…脱ぎますけど…」

とにかく…彼の家にも泊まってないです。」



「へえ…。…姉ヶ崎さんのお母さん、歳いくつ？」

「…あなたに関係ないでしょ…」

「関係なくはないでしょ。ま、いいや。セックス始めるよ」  
ベッドに座り、手を広げる毒島。

「おいで。脱がせてあげる。」  
「……」

寧々は、渋々毒島の腕の中へ…。



完全に毒島の匂いに包まれて抱かれる寧々。  
そしてめり込む、圧倒的な質量、  
硬さの毒島のペニス。

「はっっ…！うう！」

「今日も10時間くらいかな？覚悟しててね、姉ヶ崎さん♡」

(嘘じゃない。本気でこの人は、  
多分余裕で10時間抱けるんだ。)  
寧々はその絶倫ぶりに絶望するし、恐ろしくなる…。

そして、自分の感情とは裏腹に、  
さらに奥から溢れてしまう愛蜜。

3時間後。ぶっ続けのセックスで、  
弱点だけを巧みに責められ、  
寧々は絶叫の渦中に居た。

「ひああああっ、だめっ、  
そこ、だめえええっ」

「だから責めてるんだよお♡倒えばね、  
前後に動かなかったって、  
こね回すだけでも快感はつくれるしっ♡」  
「その動きっ、だめええええ！」

「横に動くのでもっ、普通とは違う快感を  
与えられるんだよっ♡  
彼氏くん、絶対知らないよねこんなの」  
「はううっ、ああ、あ、あ！」



さらに3時間後。  
イキすぎて寧々は顔を崩壊させたまま、  
目が虚空をさまよう。

「あ〜♡もうだいぶ飛んじゃってるね♡  
サトル、見たいか？姉ヶ崎さんのイキ顔っ♡  
覗いてるんだろ？でも声だけで我慢しろよっ」

「はうっ…ああ…はうっ」

「姉ヶ崎さんは俺だけのものだっ  
でもまあその内お前にも  
良い思いをさせてやる」

「ああ…イヤああ…  
覗かれてるの…？あうっ」

な？サトル…

ぐちぐち

ぬちぎゅぷ

くほくほ

あまのぞかれてるの…

ハアハア  
シッコシッコ



さらに3時間。

「あ〜そろそろ終わりかっ！  
姉ヶ崎さんを自分のベッドで10時間、6発も  
抱けりゃとりあえず満足だな！今日何回  
イッたの？百回以上イッたよねえええ!!」

「ひうう…ああああ！これっ  
駄目ええええ…またイッ…ひゃううう…！」

「いいよお！イッてえ！一緒にイクよっ！  
姉ヶ崎さんっ！一緒に気持ちよくなろっ！  
ほらっ！出すぞお寧々！イけ！感じろ！」

「ああああ！イヤああ！こんな人と  
一緒にイクのっ…ああああああ！」



「うおっ♡うおお！まんこ  
キュンキュン締まるじゃねえか！  
感じてるだろ！！！」

「やぁぁぁあはぁぁあっ、  
あぁぁあ！駄目っ、こんなの  
おおお！はぁぁんっ！」

「あ～♡最高だよな～♡  
彼氏持ちの現役JKの  
まんこで射精してるこの瞬間っ♡」

「ひうっ…あぁぁああ…  
イヤぁぁあ…！」



「う〜♡まだ出るっ♡あ〜♡  
いつも寝てるベッドにJK寝かせてっ♡  
抱きまくってまんこで射精してるこの感じっ!!」  
「はうっ...あうっ...ああっ!!」

「外で息子もシコってるかな...  
ふふふ...本当セックスって最高だよなあ♡」

こんな10代のとびきりの美少女と  
セックス出来るなんて最高だぜ」  
「あっ...ああん...ひうっ...あ...」

寧々は毒島の身体と匂いに包まれて、  
10時間の絶頂の余韻に飲まれていた。



「やっぱり泊まっていけない？  
朝まで抱いてあげるよ」

「…帰ります…」

セックス後の乱れた髪を  
直しながら服を着る寧々。

まだ快感が残っていて、膝がおぼつかない。  
半開きのドアから部屋を出ると、  
大慌てで毒島サトルがズボンの  
ベルトを締めていた。

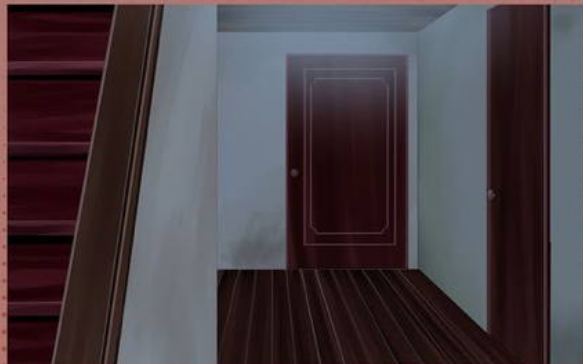
「……………」

無言で立ち去る寧々。

「姉ヶ崎さん、送って行くから」

「1人で帰れます…！」

毒島の声をかき消すように、  
寧々は玄関の扉を閉めた。



悪夢のような毒島宅での情交から、  
数日が経った。

10月ももう下旬。学校からの帰り道。

寧々は月末の、××との箱根旅行に  
わくわくしながら考えていた。

(もう少しでバイトもやめられる。  
こんな異常事態ともお別れ…。

デキシーズの売り上げは、夜の事もあって  
上がってるみたいだし…。

もうお店よりも自分の身の方が…  
彼と平和に生きる事の方が  
大事なんだけど…)

と思いながら。



この裏営業も、デキシーズの売り上げが回復したら終了するという話を毒島からも聞いた。その目処は来月の上旬だという。

辞めるつもりが1ヶ月よりは少し伸びてしまったが、来月の上旬にはこの裏営業の地獄から開放される。

裏営業とも、デキシーズとの関わりともあと少しで終わり…。裏だけでなく表のバイトも辞めることできっと毒島とも会わなくて良くなる…。

これが終われば何もなかったようにxxのもとへ戻れる。そう寧々は思っていた。



そしてまた平日、彼とのセックスを  
繰り返しながら、寧々は金曜日、  
またしても深夜のデキシーズに呼び出される。



またしても繰り上げられるセックスの狂乱。

**「おお?姉ヶ崎さん!姉ヶ崎さんだ!」**

「今日こそやれるのか?」

**「姉ヶ崎さんはずっと俺のだよ 肌に触るなよ」**

毒島はいやがる寧々を脱がす。

毒島は、店の中央のテーブルで寧々と  
セックスを始めようとし、  
セックス中の尾鳥、小鞠を呼ぶ。



毒島はオーディエンスの男たちに言う。

「お前ら、姉ヶ崎さんには指一本触れるなよ  
尾島ちゃんと小鞠ちゃんはハメたまま  
僕の指示に従うんだよ」

そして毒島は寧々のデキシーズの  
制服を取り出す。

「せっかく3人いるし  
これ着てもらおうかなあ〜♡」  
「い…イヤです…」

言葉では断るが、断れる雰囲気ではない寧々。  
毒島は、着替えた寧々をまたがらせて、  
ショーツを脱がし、まんこに挿入する…。



「うおおお！すげえ光景っ…  
姉ヶ崎さんの乳が爆揺れしている！」

「はああっ…ああ…こんな  
はしたない姿っ…見られて…る…」

「あの制服でセックスしていいのか!？」

「うおおお…最高だ！  
この制服で姉ヶ崎さんと  
ハメるの夢だったんだよなあ！」

ぶるん  
ぶるん

あっ…あああ  
見ないでっ!!

キュポッ

キュポッ♡

はるん

アッ!

ドスッ!

アッ!



毒島は寧々の制服を脱がし、  
爆乳とまんこを露出させる。

「姉ヶ崎さんココいいでしょっ！♡感じるでしょっ♡」  
「なんて綺麗でエロいおっぱいなんだ…」  
「あのおっぱいと制服たまね〜♡」

ほるん♡

はぁぁぁぁ

奥までええっ!!

ちほっ  
ちほっ!

おほ♡

ニユッ

ちほっ!

「あっ、あっ、ああっ、はぁぁっ  
奥までっ…奥まですごく突かれてっ!」

淫らに跳ねる乳に観客達は釘付けになる。



「いくよお～姉ヶ崎さんっ！出すよ！」

「はあああんっ、あっ、ああああっ、だめえっ、  
気持ちっ、良くてえ、あっ、あ！ああああっ！」

「あああ～気持ちいいっ♡まんこ締まったっ♡  
制服ファックでいくよお！  
ウエイトレスまんこに出すよお！」

ぶるっ！

ぶるん！

あゝあゝあゝ  
きもちえい  
あゝあゝ

ごほん！  
ごほん！

ぬぼん！！

「あっ！あうっ！  
あ、あああああっ！」

ドズッ！

ドチュッ！

ヌチュ！

「おうっ！ほおっ！おっ！おはああ～♡  
このまんこの締まりっ♡たまんね～♡」

「ああっ！はあ！あうっ！  
あ！あっ…あああ！」

「いいよお～♡ああ～♡気持ちいいっ♡  
「んぐっ！ああああああっ！」

「うあ～♡ エッロイイキ顔…！」

ぶるん！

ああっ！あああ～だめええ～ええ！

どぼっ！

どぶっ！！

ぶっ！！！！

ビュッ！

「はあっ！はあ！はあぁ…あう…」

「ああ～♡姉ヶ崎さんのまんこ  
最高に気持ちいい♡  
制服エッチも最高♡」

「あう…はうっ…あ…」

びるん  
ぶるん♡

あっ！あっ…  
あぁ…!!

又キエツ♡

ちよびっ♡

ギョッ♡

「まだまだやるよお！  
こんなじゃ終わらない！  
あと8回はセックスするからね♡」

「うおお！まだ観れるのか…  
エロすぎるだろ！」

ドクッ♡

ドクッ♡

ドクッ♡

毒島はゴムを取り替えて寧々を  
再び突き始める…。

「あっ、あ！あはああっ！あああ！」

「うほおお♡姉ヶ崎さんと  
制服エッチ気持ちよすぎ♡  
このまんこ本当に気持ちいいぞお♡」

「あぁ…姉ヶ崎さんの体観てるだけでも最高♡」

寧々、そして尾鳥、  
小鞠の嬌声が深夜の店に響く…。



またしても地獄のような夜が終わった。

朝まで、寧々は毒島と9回戦  
セックスさせられた。  
快感と疲れでしばらくまともに動けない。

寧々は衣服を整えて、  
逃げるようにデキシーズを出る。

そして寧々はずっと、尾鳥と小鞠の  
恍惚で惚けた顔と絶頂して痙攣する  
身体の光景が頭から離れなかった。



週末。箱根の駅。

ハネムーン新婚ごっこの旅行にウキウキする2人。  
腕を組んでまさに新婚さながら歩く。  
2人はその近くを歩く男の影にまだ気付かず。

××は、電車に乗る前にトイレに行くと言う。

「あ、じゃあ私まだ大丈夫だから、待ってるね。」  
「ごめん、ここで待ってて。」

寧々を待たせてトイレに行く××…  
と、寧々に忍び寄る影。



「姉ヶ崎さん」

「わっ?!?!」

突然肩を叩かれ、寧々は驚愕した。  
大嫌いな声、姿。

「毒島さん…?!なんで?!」

「ちょっと外で話そうか。」

「3分くらいで戻ってくるから、ね」

「でも私、彼を待ってて…」

「知ってるよ。見てたからね。さあ早く」

嫌がる寧々を無理やり  
駅の外に連れて行く毒島。



「いつから居たんですか」

「電車でも隣の車両に座ってたよ」

背筋が凍るような恐ろしさを感じる寧々。  
完全にストーカーではないか。

「おじさんとも新婚ごっこさせてよ。  
回数でいったら、彼氏くんよりも多く  
姉ヶ崎さんとセックスしてるでしょ」

「さ…最低…2人きりの旅行なのに」

「従わないと他のお客さんに抱かせちゃうよ」  
「ぐっ…それは…」





寧々は絶望的な気持ちになった。  
なんで2人きりの旅行で。  
前回の熱海に続いて、何故毒島さんが…。

誰にも言ってない。偶然じゃない。  
遠隔操作でスマホを盗み見られたり  
しているのだろうか。

それっていよいよ犯罪じゃないだろうか？  
確証はないけど。あるいは××君の  
スマホをハッキングしてる…？

とにかく、楽しい旅行が一変してしまった。  
寧々は重い足取りで、駅構内に戻る。



「あ、居た居た。寧々さん」

「あ…ごめんなさい…その…あなた♡……  
ちょっと山が綺麗だから…写真撮ってて。」

「もう、可愛いなあ寧々さんは。電車乗ろうよ」

「…うん」

「大丈夫？なんか変？」

「う、うん大丈夫！…楽しも！」



だが、寧々は電車に乗っても  
電車内の風景を楽しむどころではなかった。

彼と腕を組んだりしていたが、  
この後に起こる事を思うと。

電車を、降りた後、恐る恐る、彼に見られないように  
スマホのメッセージを覗く。

**(トイレ、3回ノックして「まだ入ってますか」って言ってね。  
寧々さんの声ならすぐわかるから鍵開けるね。)**

寧々は膝から崩れ落ちそうになった。  
この人はなんという事を…。



「××君、ごめんなさい、ちょっとおトイレ…」  
「良いよ、待ってるよ」

「ごめんなさい。」

涙目でトイレに行く寧々。

「大丈夫？お腹痛いの？」  
「…ごめんなさい。」



トイレ。

寧々は恐る恐るノックする。3回。

「…まだ入ってますか…」

ガチャリと鍵が開き、ドアがゆっくり開いた。

寧々は脚が動かない。

入りたくない。する事はわかっているから。

でも…断れない。

…寧々は重い足を無理矢理動かして、

トイレに入った。

まるでホラー映画のように、寧々がトイレに

入ると中から扉は閉められ、

中年男にハグされ、鍵がかけられる。

「待ってたよ、寧々♡」



毒島は寧々に勃起を押し当てる。  
すでに下半身裸だ。コンドームも装着済み。

「時間かけられないから、はやくおまんこしような」  
毒島は、恐怖で何も出来ない寧々の服を脱がせ始める。

「まだ濡れてないか。ローション持ってきて良かったな。」  
「…っ…んううう…」  
毒島は指にローションを塗り、  
まだ濡れてない寧々のまんこを無理矢理濡らす。

「…あなたと…ここでセックスなんてしたくない…！」  
「僕も嫌がってる寧々とはセックスしたくないよ。  
楽しもうよ。僕たち夫婦でしょ。」

膣の奥まで指を入れ、ローションを塗り終わる毒島。  
少しずつ、指を入れられた刺激で愛液も漏れてくる寧々。

「挿れるよ、寧々♡」



「んう…う!!」

旅行中だというのに、またしても  
毒島に楽しい旅行ごと犯される。

んっ! うっ!

「あー♡気持ちいい♡やっぱり  
このまんこ…現役のJKの  
ぶりぶりまんこ最高だよなああ〜♡」

「はあ…はあ…早く終わらせて…」

「旦那さんに『早く終わらせて』もないだろ?  
楽しもうよ寧々♡せっかくの  
旅行セックスなんだからさ…♡」

めっ! めっ!

ズッ! ズッ!

みっ♡

(そこっ…そこ…だめ…！ああああ…)

寧々は必死に声を抑えながら、  
絶頂を我慢している。

あ…あ…  
月々…!

ガリッ!  
ガリッ!  
ゴリッ!

ズボ!  
ズボ!  
ズボ!  
ズブ!

「寧々はここが一番弱いよね♡  
やっぱり僕のちんぼじゃないと  
届かないからかな♡」

毒島は、子宮の入口を亀頭で撫でるように、  
時には突くように、揺らすように…  
熟練のテクニックで、縦横無尽に愛撫している。

「やめっ…て くださいっ…！ イっちゃう…  
イっちゃう…すごい声が出ちゃう…」

「出して大丈夫だって♡いまそんなに  
まわりに人居ないから♡」



「ひぐっ!ふうっ!  
んくうっ!!ん~!!!!」

「おほお♡いい締めりっ♡♡  
やっぱり新妻まんこは良いね~♡」

毒島の攻めは的確で絶妙で、  
寧々は我慢しようにも絶頂を  
コントロール出来ない。

んっ!  
んっ!  
んっ!!

「ああああ…んっ!  
んくううっ!んっ~!!」

「はああ♡じゃあそろそろ寧々に  
トドメの快感いくかな~♡  
僕もお漏らししちゃお♡」

ズズッ!  
ズズ!

ズド!  
ズド!  
ズドズッ!!

ぶるん  
ぶるん

「ああっ！はぁ！ひっああああ  
あああだめえええええ！」

「ほらほら！ここ！ここでしょ！  
こんな風にされるのたまらないでしょ？  
あ～僕も気持ちいいよー♡」

毒島は膣を亀頭で押し付けたり撫でたり。  
もはや職人。名人芸。まるで指を自由に  
動かすようにペニスを巧みに操り、寧々はもう…

だめっ！  
あああ～！！

「ひううっ、毒島さんっ、  
やめてええ…もうっ、あ、あっ、  
あああだめえええええ…！！」

「あーまんこブルブルしてきた♡  
たまんね～♡僕も出すよ～♡  
新婚で一緒にイこ～♡寧々っ！！」

ドスッ！ドス！

ミッ！  
ミッ！

グッ！

ぶっ

ぶっ

「はぁあああっ！ あぁあああっ！  
んんう！ あぁあああ！」

一度は声を我慢したが、またすぐ  
嬌声を上げてしまう、寧々。

「んお♡お♡すごい締めりっ♡あ〜♡  
若いまんこは最高だな〜♡  
あ〜♡精子いっぱい出るっ♡」

あ  
あ  
あ

「ああああ！んっ！ん！  
ん〜！はっあああああ！」

「ああ♡イヤイヤ言ってたのにこんなに  
イッてまんこも、こんなに感じてっ♡  
エッチな新妻だね♡寧々」

下乳

ドクッ!

下乳  
ドクッ!

「ああっ、あ、あああああ…！」

「めっちゃ感じるじゃん寧々〜♡

セックス楽しめたね♡嫌って言ったのに  
声まで出しちゃってさ♡  
僕も気持ち良かったよ♡」

あ  
あ  
ああっ!!

「う…うう…最低…  
最悪よこんなの…！」

「また呼ぶからね♡今日はいっぱい  
楽しもうね♡新婚旅行なんだからさ♡」

快感でまだ震えている寧々の  
まんこからペニスを引き抜く毒島。

ドク!  
ドク!  
ドク!

「じゃ、また呼ぶね。  
ちゃんとスマホチェックしててね。」

寧々は無言でトイレから去った。  
まだ快感で、足元が揺れた。転びそうになった。  
しかし、急いで××のもとへ向かう。

(最低…どうしてこんな事に…)



20分ぶりに戻ってきた寧々。

「寧々さん？大丈夫？調子悪いの？」

「う…うん、ごめんね…もう、大丈夫だから」

「なんだか顔も赤いし…無理なら言って。」

「うん、本当に大丈夫。」

(なんでこんなに優しい彼が居て、  
あんな酷い目に…。)

バスで××の隣に座った寧々は、  
しばらく彼の手を握っていた。



2人はバスで山の上に向かい、美術館へ。

ひとしきり新婚ごっこしながら  
デートを楽しんだあと…

寧々は、しきりに鳴っている  
スマホをチェックした…。

メッセージには、  
「駐車場に車、止めてあるからね」との事。

「…ごめん××君、私おトイレ…」  
「ね…寧々さんっ、大丈夫？お腹痛い…？」

「大丈夫、ごめんね。」



寧々が駐車場に向かい、  
指定された車へ。  
窓を嫌々ノックする。

「入って、寧々」

すでに下半身裸で、フル勃起している毒島。  
コンドームも装着して準備は万端。  
シートも倒している。





「こんなあ…車の中でなんて…」

「興奮する？」

「違います…」

「あ～♡寧々のまんこ、もう濡れてるじゃない♡  
セックスするから想像しちゃった？」

「…違います…んっ！」

「大丈夫、外から中は見えないから。  
たっぷり楽しもうね。」

「イヤっ、あああ、  
早く終わらせて…戻りたいからぁ…」

寧々のまんこに毒島の極太のペニスが  
みしりと埋め込まれた。

(はあっ、おっき…いつ……！！)



15分後。

「ひっ！  
んん～  
うっうっ！」

寧々はずでに  
2回目の絶頂。

びく  
びくっ！

アアアッ…！

ズンッ  
ズンッ！

そこへ、間が悪く××から電話がかかってくる。  
セックスの揺れで車のシートに落ちたスマホ画面。  
寧々をイかせまくる毒島は彼からの電話だと  
わかると、それを応答してしまう。

「ほら寧々、間男からだよ。」

「ひっ…?!あああ…」

「寧々さん、大丈夫?!

トイレ長いから…」

寧々は毒島にスマホを  
耳に当てられて  
手に持たされ、  
もう答えるしかない。

「××くんっ、あ、だ、  
大丈夫…っ、  
ちょっと混んでて…」



毒島はシャツとブラをはだけさせて  
寧々の豊満なおっぱいを露出させる。

「だってあんまり長いから…心配になって」

「だ、大丈夫…もうすぐ  
終わると思うから…っ！！！」

毒島は再び、  
その極太のペニスで、  
寧々の膣奥を  
掻き回しほじくる。

「~~~~ツツツ！！！！」

思わず、口を塞ぎ、声を  
漏らさぬように絶頂する寧々。

「寧々さん？」

「んう、大丈夫、  
もうすぐ、終わるからね…」



もう出るで...  
んああん!!

びるん ぼるん!

「あ〜♡出るよ、出る、もう出る」

毒島は小声で言う。

「はあ、もう出るって…あつ、うん、もう出るから終わる…」

毒島は腰を小刻みに振り、亀頭の先は振動させるようにして、膣奥パイプのように愛撫。


「出る、出るよ、もう出るよ寧々♡」

「~~~~っ!!!  
っ、うう、出る、あ、  
~~~~っ!!!!」

「寧々さん?  
寧々さん大丈夫?!」

ズ  
ッ  
ッ!!  
ズッ!

ドズ!  
ドチ  
ッ!!



毒島は寧々の乳首を一気につまむ。  
さらなる快感が寧々を襲う。

「つくう、んう！  
~~~~~っ!!!!!!」

ペニスがブルブル震えて、射精の感覚。  
寧々も声を最大限にこらえながら大絶頂。  
その無言の様が、むしろ膈内での射精の  
感覚のリアルを、双方に伝えて…。

「はぁぁ～最高♡~~~~っ♡  
んう♡まだ出る♡間男に  
気持ち良いって言ったらどうだい？」

「ん~~~~~!!  
う~~~~~!!」



「はあ、はあ、出た、出たから、  
もうすぐ戻れるよお…待っててね…」

「う、うん、寧々さん…  
お腹痛いたら無理しないで」

「ありがと、もう切るから…  
すぐに行くから…っっっっ?!!!!」

寧々が電話を切ったその  
タイミングで、再び硬いままの  
ペニスで往復を始める毒島。

「ひゅううう!! あああ  
ああああっ!!!!」

「イこうぜえ、まだ  
イキ足りないだろ?  
寧々♡」

あっ…  
ああああ

グニッ!

グニ!

グニッ!

ヌッ

ヌッ

ビッ



はっ!  
ああ!  
っ!  
ひああ!

ぶるん  
ぶるん

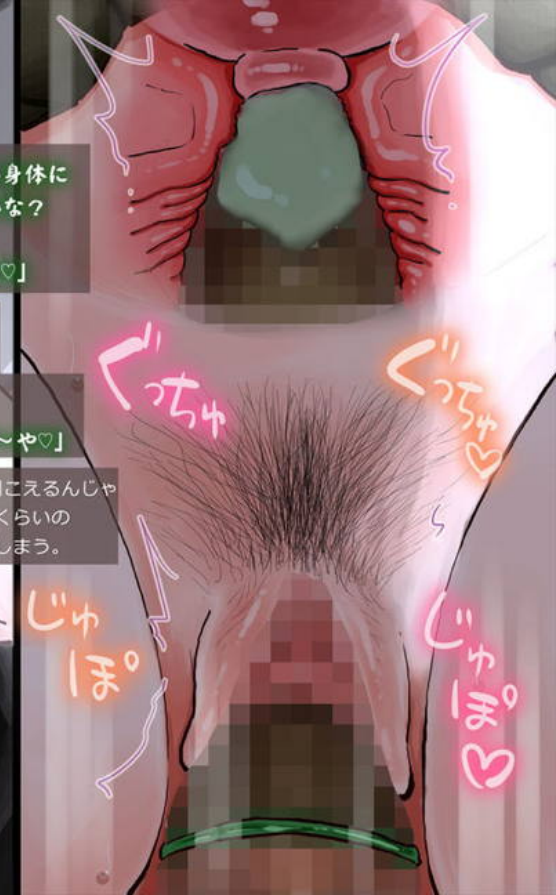
「ひぐっっ! イっう  
ううう...! はっううう!」

「またイってるイってる、本当イキやすい身体になっちゃったね♡それとも僕の時だけかな? このおちんぼ気に入っちゃったよね? まあ旦那さんのちんぼだから当たり前か♡」

「あひっ、あああああ!  
あはあああああっ!」

「お~締まる締まる♡  
声我慢してたからすげ~や♡」

寧々は、外に聞こえるんじゃないかというくらい  
の声で絶頂してしまう。



「っちゅ  
っちゅ♡  
じゅ  
じゅ♡  
じゅ  
じゅ♡

しばらくして、這い出るように  
毒島の車を脱出する寧々。

駐車場から、ふらつきながら彼のもとへ。

「また連絡するからね。××君なんて言う  
間男に本気になるんじゃないよ。」

どこまでふてぶてしく、凶々しい男なんだろう…。

寧々は怒りながらも、あまりのセックスの凄さに  
膣を締めらせながら、膝を震わせながら、  
なんとか衣服を整えつつ、彼のもとへ戻った。





「寧々さん。大丈夫？あんまり長いから…。」

「ごめん。ごめんなさい。ごめんなさい…！」

寧々は安心感で、思わず××に抱きついてしまう。

「わっ!!寧々…さん」

「ごめんなさい。もう少しこのまま…」

寧々は、彼の存在を今一度確かめるように  
××を強く抱きしめる。

寧々が涙声なのに気づき、ハグを終えたあと、  
明らかに目が充血しているのにも××は気づいたが、

まさかさっきまで毒島に抱かれていたなどとは  
思っていなかった。この旅行に毒島が付いてきて  
寝取られが進行しているなんて事も……。



××はなんだか奇妙な違和感と不安を感じながらも、寧々を連れて旅館へとたどり着いた。

夕食の前に温泉に行こうと言う寧々と一緒に別々に温泉へ。

ロビーで待ち合わせ、何事もなく湯上りで落ち合う。××は寧々の浴衣姿にデレながら、一緒に外を散歩。

だがそこで寧々は、スマホのカメラを起動した時、画面に映る、毒島からのメッセージに気付いてしまう。

「風呂だと言って××を男湯に向かわせてね。  
そのあとロビーで待ち合わせ。  
間男には1時間って指定してね。旦那より」



短い文章なのに圧力満点のメッセージに恐怖を感じる。  
寧々は散歩も満足に楽しめなくなった。

「ね…寧々さん、大丈夫？なんか顔色が…」

「う、うん大丈夫。あのね。旅館にもどったら、  
その、また温泉…行かない？」

「う、うん…良いけど…体調悪いなら言ってよ」

「ありがとう。でも大丈夫。」

本当は体調どころか、こんな異常な出来事に  
巻き込まれている事を言ってしまった方が  
良いのだろうかとすら思う。

(でもそれももう少し。  
もうすぐ、終わるから…。)



旅館。またロビーで待ち合わせとして、  
××は男湯へ向かった。

寧々が毒島の指示どおりロビーで待っていると…  
約束どおり毒島が現れた。

「行こうか」

「どこへ…？」

「寧々の部屋。」

「え…？」

「僕の部屋、ユニットバス付いてないんだよ。  
寧々と間男の部屋で一緒に風呂入ろう。」

「い…嫌です…もう…」

「旦那の頼みを聞けないの？  
ぼくたちラブラブでしょ？」

「……わかりました…」



強烈に嫌がる寧々の足取りは重い。  
渋々、寧々は自分たちの部屋へ…。

毒島は、寧々が鍵を開けている時から  
もう股間を寧々の尻に押し付けている。

「お風呂♡お風呂♡寧々とお風呂♡」

寧々は心底おぞましいと思いながら、  
大嫌いな男を自分達の部屋へ入れた。



部屋に入るなり、毒島は寧々の胸をまさぐり出し、手で愛撫しながら服を脱がせ始める。

乳首をつまみ、ショーツに手を入れてクリトリスをいじる。

寧々は快感のあまり膝が折れてしまう。立っているのも精一杯。

「…あんっ、あん、あっ…ああっ」

「もっと声出していいよ、錠は寧々が持ってるんだから彼は帰ってこれないでしょ」

「でも、ああっ、もしバシたら…」

「大丈夫、間男は寧々の事大好きだから大人しくロビーで待ってるよ。

まあ僕の方が好きだけどね。

ちゃんと1時間で終わらせるから大丈夫。」



「う…うう」

「それより、自分と彼氏クンの客室で、別の男とこれからセックスする事に興奮してるでしょ？」

「しま、せんっ、ああああっ」

「おっと、今は僕が旦那さんだったもんね。これが普通か。夫婦同士、たっぷり愛し合おうね。大好きだよ寧々。」

「ひぐっ、うううああ…」

服を脱がされ、完全に裸にさせられた寧々。

毒島もあっという間に裸になり、バキバキに勃起した極太のペニスにゴムを装着する。

毒島はバスタブにお湯を張り、寧々と一緒に風呂に入りながら、湯船につかってセックスを始めた…。





あっ!は!  
あまあま!!

寧々は違和感を覚えていた。  
もう30分、激しく責められているのに。

いつもなら、3回は絶頂  
させられてしまうのに。

毒島は、寧々が絶頂する寸前で、  
確実に愛撫をやめてきている。

××のペニスでは届かない場所を愛撫して。  
イキそうなのに、絶対にイけない。

「ひあっ、あっ、あっあ、  
ああっそこっ…あうっ、  
あ、だめっ、あう、あっ！」

「いいだろ！いいだろ寧々！  
ここいいだろ！」

じゅぽ

じゅぽ

じゅぽ

じゅぽ





あっ!?

はあぁ!

びく!

ピタッ!!!

「はうあつ、あ…!あ…?!」

毒島は、やはり絶頂寸前で動きを止めてしまう。

「あ…ん…?!」

「どうしたの寧々さん? イキたかったのにイけなかったみたいな顔してるじゃん」

「…ひぁ…はあ…はあ…違いますぅ…そんなんじゃ…」

再び子宮口付近を、撫でるように、ほじくるようにパイプする毒島。

ひゃあ!! はあ!!

さらに30分。寧々はやはりイカせてもらえず、ムズムズを抱えながら…。

「んぐっ!くっ!んふう…あっ!あ!」

「ん〜♡モヤモヤするね〜♡そんなだったら自分から腰を振ってもいいんだよ?」

「ん…そんな…彼を裏切るような事…絶対出来ません…」

寧々にはそれが明確な1つの越えてはならない一線なのだ。

「大丈夫だって。新婚ごっこなんだし。おくさんなら自分から腰振るって!」



あぁあぁ

ドッ

イッ... あぁあぁ!

ドス! ドス!

チャポ

チャポ

ドス

ドス!

毒島はピストンを激しくする。

「じゃあ僕イっちゃおうかな！  
一緒にイこうよ寧々さん！ねっ！」

「ひあっ、ああああ、イキつ、  
ませんっ…！一緒になんか…」

「言いながらまんこ締めまくってるじゃん♡  
あ～♡気持ちいい♡ああ！出すよお！  
出すよお寧々さん！一緒に気持ちよくなるっ！」

「それだめええええっ、  
イっ、くっうううっ！」

ああ!?  
ふああああ!!

ぐっ!!!

ドグッ!!! ドグッ!!!

ドグッ!!!

毒島はピストンを激しくする。

「じゃあ僕イっちゃおうかな！  
一緒にイこうよ寧々さん！ねっ！」

「ひあっ、ああああ、イキっ、  
ませんっ…！一緒になんか…」

「言いながらまんこ締めまくってるじゃん♡  
あ〜♡気持ちいい♡ああ！出すよお！  
出すよお寧々さん！一緒に気持ちよくなるっ！」

「それだめええええっ、  
イっ、くうううっ！」

あ!!!??

はあ!

そ...ああ!?

ピタ!!!

ズッ

ズ!

ズ!

そして毒島は、欲求不満な寧々のまんこをさらにほじくり回す。寧々がイキそうになると完全停止。寧々は絶対にイカせてもらえない。

「あつ、あつ、ああああ！何なの…これええ…」

「うふふ♡寧々さんのスケベ度チェックだよ♡」

「ひいつ、あああ、だめっ、  
そこだめっ、ああ、なのにつ、ああああ！」

「イキたい？イキたいんだね？  
ちんぼ欲しがって締めてるじゃん♡  
やっぱりドスケベまんこだね～♡」

1時間。  
時間通り1時間でセックスは終了する。

寧々と毒島は後片付けをして、風呂を出る…が。  
寧々は、頭が真っ白だった。

片付け作業ももはや機械的に手を  
動かしているだけのような。  
こんな感覚は初めてだった。

ただ、膣奥が快感を欲している。

膣奥にはマグマが溜まっていて、  
それを快感で吐き出したいのに、  
完全に膠着させられているような。

歩いて内股が擦れるだけでムズムズが  
膣奥まで駆け上がる。

しかし、そのムズムズは、  
あのペニスでないと解消出来ない。  
それも、寧々のカラダは分かっていた。



毒島は完全に狙い通りにいったと感じた。  
寧々のカラダは、寸止めで快感が制限されて、  
今絶頂を欲してどうしようもない状態だ。

毒島は、その寧々を見て、更に行動を実行する。

「じゃあね寧々さん。気持ち良かったよ。おやすみ」

「は…はい。」

寧々は戸惑っていた。こんな状態でセックスを  
終えたのは初めてだ。このまま眠れるのか？

彼とセックスして満足出来るのか？

(どうしよう…。)



寧々のカラダは、膣奥が、完全に  
毒島のペニスを欲しがっている。

眠れば忘れるかもしれないが、  
今、寧々は毒島のペニスが欲しい。

毒島は寧々から離れて体を翻して去っていく。  
寧々は戸惑う。  
毒島を呼び止めてしまおうかと寧々は思う。

寧々は今、とにかくカラダが熱い。  
膣奥がムズムズしている…  
毒島の事は好きじゃないのに。

いいのか？毒島が去ってしまう。  
本当ならば大嫌いな男だから行ってしまった方がいい筈なのに。  
でも××のペニスで寧々の体は満足できるのか…？

寧々は戸惑いながら、何もすることが出来なかった。  
彼との約束通り、待ち合わせで  
ロビーへ向かおうとした、その時…。





「ああ寧々ちゃん。やっぱり駄目だ。

まだ寧々ちゃんとやりてえわ。」

「えっ」

ビクン。毒島が戻ってきて、寧々に声をかけた。

寧々は、膣奥がときめいてしまったのを、感じた。

明確な膣奥の鼓動。

毒島には相変わらず嫌悪感しかないし、全然好きでもないのに。

今膣奥が求めているモノはそこにある。

またフル勃起している巨大なペニス。

「彼氏クンとロビーで会ったらさ、休憩室で休んでもらってさ。

もっかい温泉入ってくるって言って車でやろうよ。」

「わ…私は…」

したい。したくないのにしたい。

「いやですけど…わ…わかりました…」

毒島には抱かれないのに、膣奥が欲している。

ときめいている…。

「風呂にまた入るつもりで駐車場の車に来てね。寧々。」



旅館のロビー。

何も知らない××は先にロビーで  
ずっと待っていた。

「あ、寧々さん。」

「ご、ごめんなさい。先にあがって、  
ちょっと…お飲物を飲んでて…。  
お風呂、良いお湯だったね。」

「うん。じゃ行こっか」

「ま…待って…。そのね。

良いお湯だったからまた入ろうかなって…」

「え?! 大丈夫? のぼせない?

たしかに気持ちいい温泉だったけど」



「私、ここのお風呂気に入っちゃって…

××くんは休憩室で待ってて？

お部屋に戻っていても良いよ。

それとも、××くんもまたお風呂入る？」

「んー…じゃあ休憩室行ってようかな。

マッサージチェアあったし。」

「うん。じゃあ1時間後に、またここでいいかな？」

「オッケー。寧々さん。」

××は、特に疑問にも思わず休憩室へ向かった。

××はこの後、また寧々とセックスと思うと  
勃起しそうなのを堪えるのに必死だった。

まさか寧々と毒島がセックスの  
続きをするとは露とも知らず。

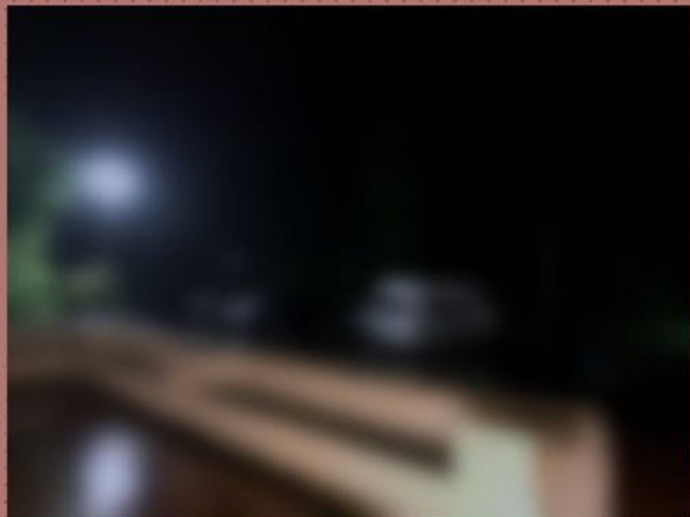


××が休憩室へ向かったのを見て、寧々は駐車場へ…。

心臓が早鐘を打つようにドキドキしている。

毒島の事は嫌いなままなのに、この鼓動はどうしたことか。  
腔奥が熱い。履いたばかりのショーツは、濡れている。

毒島が後から歩いてきて、寧々を車へ誘導する。



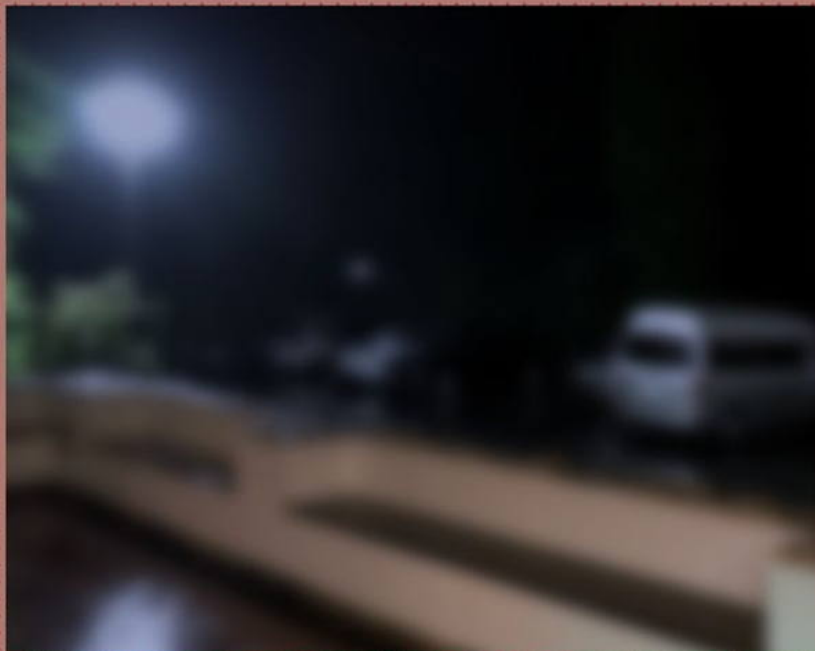
毒島の車。  
鍵が閉められ、シートが倒された。

毒島は浴衣の帯を解き、巨大なペニスを露わにする。  
無意識に喉を鳴らしてしまう寧々。  
毒島は寧々のショーツに手を這わす。

「あれ？もう濡れてない？そんなにエッチしたかったの？」  
「ち…違います…。さっきの…ちゃんと拭いてなくって」  
「それにしては濡れすぎじゃない？ぐしょぐしょだよ」  
「……………」

「まあいいや 我慢出来ないし、寧々も  
準備万端なんだから挿れるね」

毒島はLLサイズの避妊具を着ける。  
それを凝視してしまう、寧々。  
いつもよりも瞳孔を開いて爛々とした目で  
無意識に見てしまう。吐息が熱い。呼吸が荒くなる。



「まっ、待ってください」

「どうしたの？」

「今、挿れたら、なんか…」

「そんなに興奮してるの？」

「ち、違う、違いますけど…」

「挿れるよ」

「ちょっと、落ち着かせて下さい…。

今、すぐは…まずいかも…しれなくて」

「なんでまずいの？寧々さん珍しいじゃない。

こんなにまんこ汁、挿れる前から垂らしてるよ♡」

「こ…これは…違うの。

興奮してるわけじゃなくて。でも…。」

「こんなの見てたら我慢出来ないよ。挿れるね♡」

「ちょっとまって、まって下さい…やぁんっ！」



「ひぁあううっ!!」

「おほ♡先っぽだけなのにスゴイ締めりっ♡」

あぁあうっ!!!

ひい

膣口だけじゃない。  
寧々の膣全体が大きく締まった。  
特に、子宮入り口付近は  
待ちわびたペニスに歓喜して震えた。

(だ…駄目…これ…  
こんなの…こんなに…! )  
(完全に寸止めの効果が出てるな。  
先っぽだけでこの喜びよう♡)

「じゃあ寧々、奥まで一気に挿れるよ?」

「ひぁ…奥までえ…?!」

ギョキッ!!  
じゅぽぽ♡…♡

「ひっ！ひいひいひいっ！！！」

奥まで貫いたペニスによって  
強烈な電流が走ったような快感。

ひいっ！！

ストロパン！！

「うおっ♡あったけ～♡」

そのまま毒島は、寧々の膣奥を  
パイプするように小刻みに揺らす。

「ひあっ、だめ、それ  
だめええええ！あああああっ！」

「トrottroでホカホカの  
寧々まんこ最高だな～♡」

めい  
めいっ♡



イク、もう今イク、と寧々が思った瞬間、  
毒島は愛撫をやめてペニスを引く。

「ふあっ?!?!」

あっ!??

「あ～ヤバイヤバイ♡  
僕がイっちゃいそうだった～♡」

「あ…ああ…あああ…」

「どうしたの寧々ちゃん?  
物欲しそうな顔して」

「ん…うう…」

「イキたいの?  
このおちんぼが欲しいのお?」

「ち…ちが…違います…」

「違うならやめちやおつか?」

「そ…それ…それはあ…!」

「じゃあ続けてあげるね～♡」

「ひあっ! あああああ!」

ずるん!!

キュッ!

ギョッ!

毒島は再び寧々の膣奥に亀頭をセットし、  
問答無用に責め始める。

ひっ!

ひっ!

ひっ...

ひあああ...!

「ほら！ほらほら！いいでしょ?!」

「あうっ、ひっ、ひあああああ！」

寧々はすぐに絶頂しそうになる。  
その度に、毒島はペニスを引き抜く。

「あああああっ?!」

「ん〜♡すごいスゴイ♡エッチなおつゆ、  
どんどん溢れてくるよお♡」

びりびり

ずる!

びり

ギク!!

ズン!!

30分後。  
そんな行為がひたすら繰り返された。  
寧々はどうしても膣奥で絶頂させてもらえない。

毒島も、寧々の膣でピストンしたい衝動を  
抑えながら、とにかく寧々を焦らす。

「ここでしょ?!ここがいいんでしょ!」  
「ああああ、そこおっ、そこですうっ、  
そこ、だめえええっ!」

膣奥の締めまりが激しい。絶頂させてもらえない  
もどかしさは激しい反応になって現れている。

「ほらほら!もっと気持ちよくなってよ!」  
「ひうう!ああ!イクっ、  
イクうううっ、イっちゃはあああ!」

あぁあ  
イクっ、イク!  
イっちゃあぁ!!

イク!

グググ  
グググ  
グググ

イクイク  
イク



だがまたしても毒島はペニスを引く。  
「はうっあっ！ あはあ！ ああっ！」  
寧々は愛液を噴出させる。

ああ！

はあああああ！！

ぬるっ！！

「あ～ヤバイヤバイ♡どんどんまんこ  
熱くなってるよ♡  
こんな寧々さん、初めてだね♡」

「あっ…ああっ…！ ああ…」

毒島を見つめる寧々。嫌いなのに、  
気持ちに反してにペニスを懇願する目…

「いよいよヤバイ顔になってるね♡  
そんなにオチンポ欲しいのお？♡」

キュッ！！

70  
ヤッ！

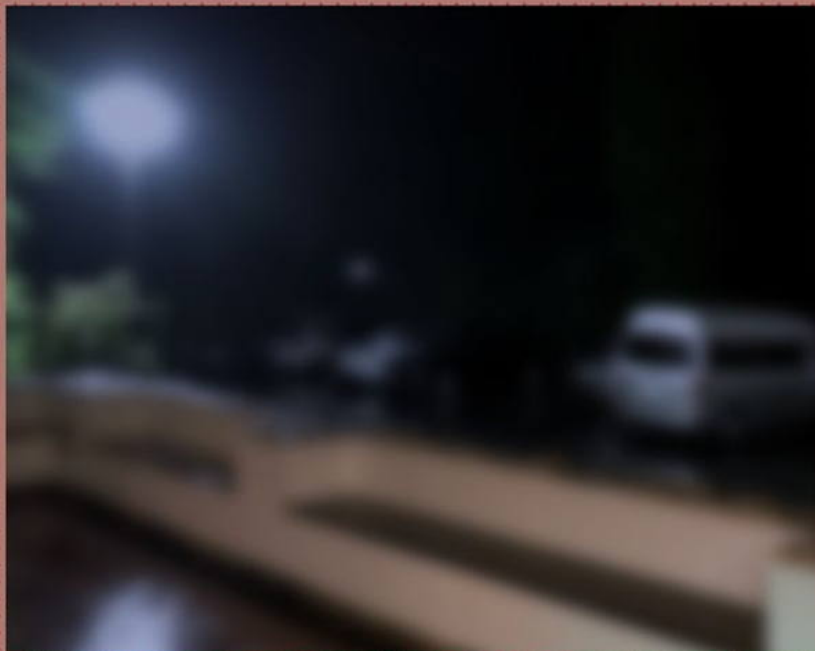
45分経過。

寧々はいよいよ意識が朦朧としてきて、  
もはや絶頂すること以外考えられなくなってきた。

顔が惚けて崩壊しようとも、  
もう膣奥からの欲望には抗えない。

毒島は全てそれを手玉にとるようにコントロールし、  
楽しむように寧々の快感を操る。  
極上のボディを感じながら。

車のシートは寧々の漏らした愛液で  
べちょべちょになっていた。



「寧々さんイキたいんでしょ？  
イキたいって、  
イかせてって言いなよ！  
言えばイかせてあげるよ！」

あぁ！  
そ、アゲえん！

ズブ

「言わ…ないですっ…！  
そんなんじゃ…ないです  
から…！ひうっ！」

めほっ♡  
ごほっ♡

「こんな崩れた顔になって！乳首もクリも  
おっ物てて！まんこ震わせて！マン汁  
とろけさせてイキたくないわけないでしょ！  
ほら！ほら！これ！たまらないでしょ！」

「ひああああっ！ちがっ、ちがいますうう  
イキたくなんか…ないっ…ああああそこ  
駄目ええ！ひあああああつくるあうううう…！！」

青島のお撫で、寧々は  
また絶頂しそうになるが…

「んぐううっ?!うううっ!  
ひあんっ!うっ!!」  
毒島は腰を引いてしまう。

ズレん!!

「おほ～ほほ♡締め付けがスゴいわ♡  
でも子宮口でイケてないよね♡ちゃんと  
イキたいって言わなきゃ♡もう時間もないよお♡」

「ひっ!ひいっ…  
いっ…ああああ…!」

びく

びく!!

「あ～あ～すごいマン汁だな。  
シートがべちょべちょだ。  
こんなに泡立ててネバついて♡  
カラダもまんこもイキたいって証明してるよお♡」

毒島はまたペニスを  
最奥まで差し込む。

「どうするの？イキたいでしょ？  
寧々さん！イカせてほしいでしょ！」

「イキたくなんか…ないですっ…  
あなたでなんか…ああああっ」

「じゃあ今日はもう終わりだよっ  
イケないまだだよ～ 僕のおちんぼじゃないと  
まんこの奥の奥まで届かないでしょ！  
子宮でイケないでしょ！」

「ああっ、でも、  
ああああああっ！」

毒島は今まで以上に、  
執拗に焦らしながら  
寧々の最奥をほじくる。

「時間ももう無いんだよっ！」



寧々はもう我慢の限界だった。  
そしてそれを晴らしてくれるのは  
毒島のペニスだけだ。

イキたい  
イキたいですっ！  
イかせて  
下さいっ！！

ごりっ！  
ごりっ！  
ごりっ！

ズボッ！  
ズボッ！

「ああああっ！××くんごめんなさいっ、  
イキ、たいですっ！イかせて、下さいっ！  
あああああ！毒島さんっ、  
イかせてくださいいいいい！！」

「旦那なんだから久仁彦さん、だろおっ！」  
「久仁彦さんイかせて下さいっ！  
あああああっもう駄目ええええええ！」

「いくよおっ寧々っ♡大好きな寧々の  
まんこで一緒に絶頂しよっ！  
一緒に気持ちよくなるうなっ！」

毒島は最大限に最奥で  
ペニスを振動させ、そして…

腰を引き、入り口で射精してしまった。

「ひゅううっ?!あうっ?!

ああああああああっ?」

「おうっ!おっ♡おとおお♡  
おふうおとおおおお!」

膣奥で絶頂出来ると思った寧々は、  
まんここそ強烈に、締め、漠然とした  
快感こそ感じられるものの…。

「あっ?!はあああっ?!  
んあ?!?!ああああ…!」

マグマが噴火するような、  
快感の爆弾が弾けるような、  
望んでいた絶頂をまたしても得られなかった。

「あ～気持ちいい♡大好きな  
寧々のまんこで射精してるよ～♡」

「ひあ…ああ…なんで…」

「いや～ゴメンゴメン♡僕だけ  
気持ち良くなっちゃった♡また今度ね」

「ああ…そんな…」

「もう時間だから帰ろう。  
あ～♡まんこすごい  
締め付けてるけどもう時間だよ。」

「うあ…ああああ…」

「あっついマン汁、奥からどンドン  
溢れてるけどもうだ～め♡」

寧々のまんこからはぐしょぐしょに  
とろけた愛液が泉のように  
絶えなく湧き出していた。  
膣奥での絶頂を渴望して…

あんな  
なんで…

びくっ!

びくっ

びくっ!

びくっ!

寧々はしばらく立てなかった。  
快感というより絶望で…。

果たされると思った快感は裏切られ、むしろ、  
より絶頂を貪欲に求めるように膣奥が疼いている。

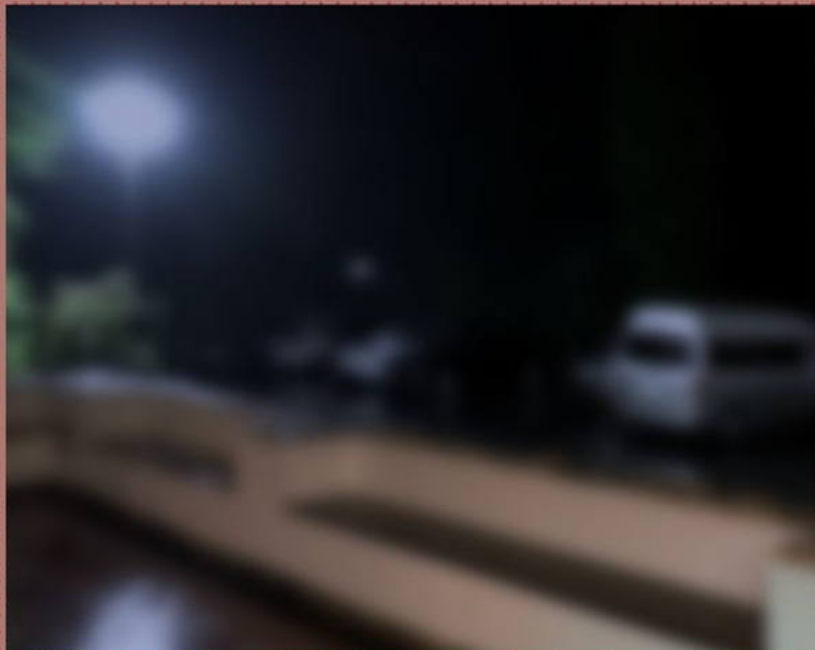
ムラムラし、どうしようもなくムズムズする。

「このシート、寧々のまんこ汁の匂いがついちゃうな～♡  
最高だわ♡寧々のスケベ汁の匂い嗅ぎながら運転とか♡ふふふ♡」

寧々は虚ろな目で衣服を整える。  
セクハラ発言に反応する余裕もない。  
ショーツは履いたそばから溢れる愛液で濡れた。

「じゃあ先に戻りなよ。僕は片付けしてからいくから。  
あと寧々のマン汁も紙めてから行きたいしね…♡」

寧々はゆっくりと立ち上がり、ホテルへ戻ろうとする…



「やっぱりイキたかったよね。」

毒島が寧々の背中に問いかける。

寧々は思わず足を止め、びくりと肩を震わす。

「この後さ、僕の部屋に来てもいいんだよ。」

夫婦なんだし、一緒に寝ようよ。一緒に旅行の夜を過ごそう」

「で…出来るわけないです…。」

××くんと一緒に…過ごすんです…本当の…旦那さんと…」

「本当の、って、新婚ごっこでしょ？結婚してないし、

寧々を好きな気持ちなら僕も負けないけどな。

それにどっちのちんぼなら寧々を、満足させられるか…」

「やめてくださいっ！彼を、裏切るような事絶対出来ません」

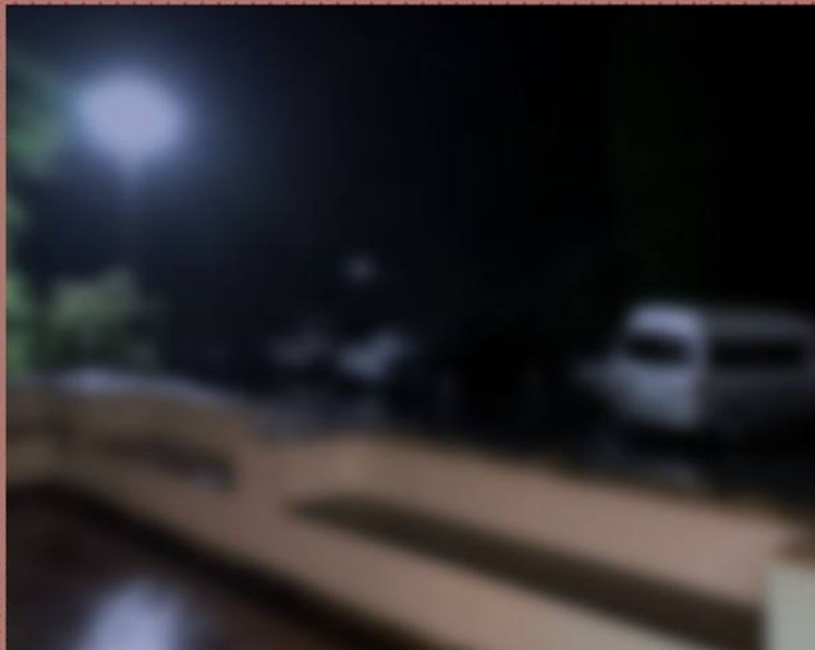
「大丈夫だよ、僕との新婚ごっこなんだから。

新婚なら一緒に寝るじゃない」

「私は彼と新婚ごっこしてるんです…！

か…彼の元へ、帰りますっ」

寧々は小走りに駆け出した。

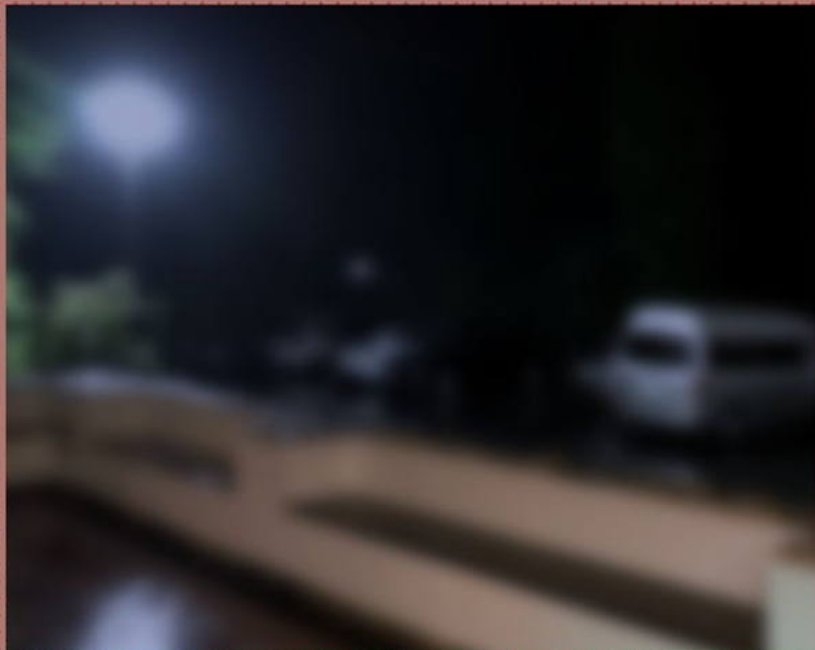


だが足元はふらつき、途中でびくりと震えて  
立ち止まり膝が震えた。そして数秒のちに再び駆け出す。

「ふふ…あのちんぽで満足させられるわけないんだよなあ…」

毒島はその巨大なペニスをみるみる勃起させる。  
淫猥でいかつい強烈なシルエット。

ホテルに消える寧々を見ながら、車内に溢れる  
寧々のマン汁臭を嗅いで、  
毒島はさらにその剛直を硬くしていた。



寧々がロビーに戻ると、××の姿はない。  
まだ休憩所か、あるいは部屋に帰ったか。

寧々は毒島とのセックスの残り香を心配し、  
女湯へシャワーを浴びに行く。

寧々の膣奥から、愛液がまだこんこんと溢れている。  
ショーツを濡らし、脱いだそばから一滴、  
また一滴と床に滴っていく。

シャワーを浴びている最中も、  
皮膚をつたうシャワーの水滴が快感を呼ぶほど、  
寧々のカラダは敏感になっていた。

快感で朦朧とする寧々…。



その頃××は部屋に戻って勃起していた。  
これからいよいよ寧々とセックスである。

(未だに信じられないけど、あんなに可愛くて  
おっぱいも大きいカノジョと  
セックス出来るんだ…)

学校でも1, 2を争う極上の美人と  
裸で抱き合っ、ちんちんをあそこに  
挿入できるなんて…)

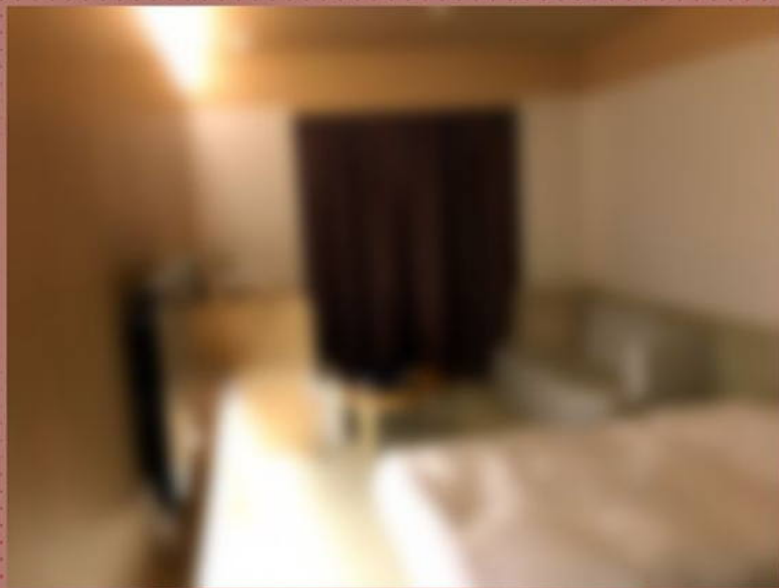
などと考えながら××が  
股間を膨らませていると…。

「ただいま…。」

寧々が帰ってくる。  
のぼせているのか、かなり顔が赤い。そして…

「寧々さん。長かったね。いいお湯だった？」

寧々はスイッチで電気を消して、  
そのまま横になっていた××に倒れこんだ。





「寧々さんっ」

「あなた…♡」

熱いキスをする寧々。

「寧々さん…なんだか様子が」

寧々は××の服を積極的に脱がせる。

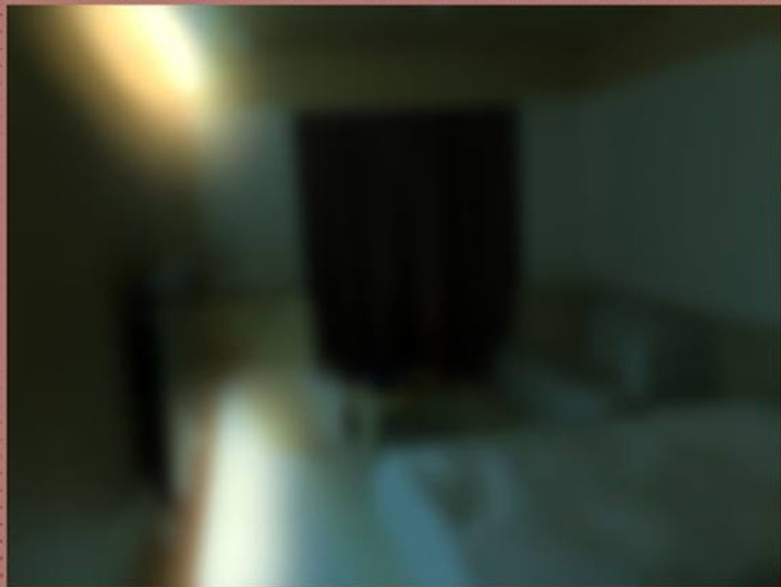
「夫婦なんだからぁ…するでしょ?」

「う…うん」

××も寧々の浴衣を脱がせる。

相変わらずの爆乳が露わになって、

そして脱がせたショーツはびしょびしょだった。



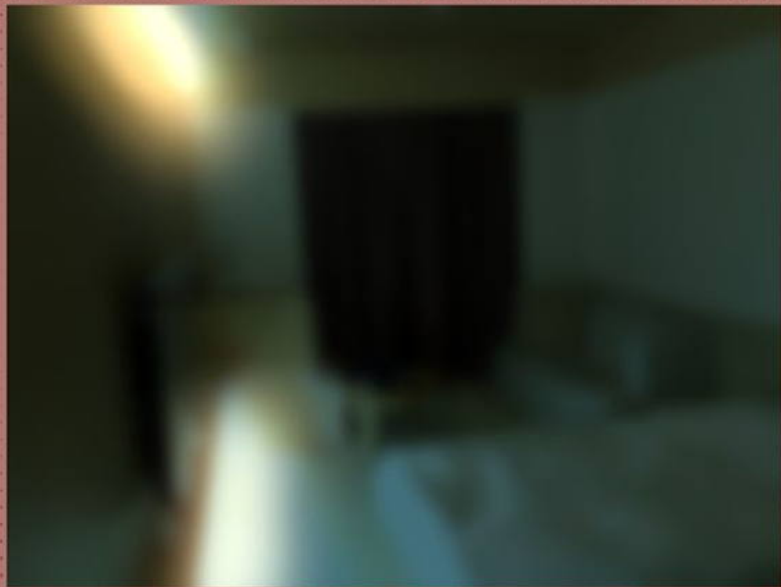
「これ…あなたとセックス…出来ると  
思ったら…わたし、興奮しちゃって」  
「うおおおお…寧々さん…寧々…！」

寧々には彼とセックスする興奮もあっただろうが、  
大半は毒島に寸止めされたもどかしさから来る愛液だ。

そうとも知らず、××はぐしょぐしょに  
濡れた寧々の陰唇を覗いて興奮し…。

「寧々さんっ 俺も我慢出来ないよ…！  
挿れるよお…！」  
「うん…♡××くん…あなたが欲しいの♡」

急いで避妊具を装着し、××は寧々と結合する。



「うおお…寧々さんっ 熱い…♡とろとろだ…♡」

「あ…あなたに…すごく興奮して…♡あんっ♡」

「はあ…入った…よ…寧々さん…  
全部入ったよ…！♡」

「ぜ…全部う…♡あうっ♡」

足りない。どうしても欲しい部分に、  
この長さでは届かない。

「もっと…♡もっとお♡欲しいよ♡」

「腰？腰を振ればいいの？」

もっと奥まで挿して欲しい。のだが。

「もっと奥まで来て♡♡」

「あ～寧々さんっ！

気持ちよすぎるよっ！！」

ちゅ♡  
ちゅ♡  
ちゅ♡  
ちゅ♡

♡=♡

あ♡♡

ちゅ♡  
ちゅ♡

20分後。  
「あ～寧々さんの膣内いつもより  
トロトロしてて熱くてエロすぎるっ…  
もう我慢できない…！」

「もっと…もっと  
奥までしてえ…♡  
もっと腰っ、振って♡」

ちゅ♡

ちゅ♡

もっとして♡

奥まで♡

ドチュ

ヌグ

ヌグ♡

モミュ

「も…もっと…？もう出るよ…  
もう出ちゃうよお…！  
寧々さん…もうイツちゃうよお♡」

モミュ♡

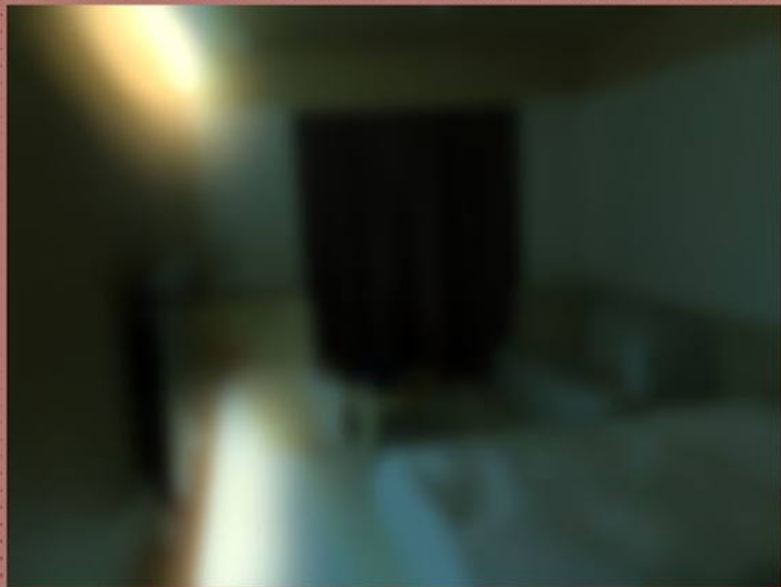
「もっと来てえ♡もっと欲しい♡  
あなたのおちんちん、  
奥まで欲しいっ！♡」



1時間後。

2度目のセックスを終え、

もう3度目の射精に入ろうとしている××…。



「寧々さん…すごい汗だし…  
すごい熱くて中トロトロだし…  
いつもよりエロすぎて…ああっ」

「あなたのおちんちんが…  
欲しいっ♡…あなたので  
もっと奥まで愛して欲しくて…♡」

もっと奥まで♡

ちゅるっ

ちゅっ♡

ちゅっ♡

♡

ぬるっ

ぬるっ

ぬるっ♡

「ああそんな事言われたら…  
もう我慢できないよお…  
出るよ…！出るっ！」

「待ってえ…もっと頑張ってえ♡  
もっとドキドキさせてえ♡  
もっと奥までえ…ああああ♡」



「んおっ！あああ！とろけそうっ！  
吸われていきそうだっ！  
気持ちよすぎて…！」

「んうう♡んっ♡まだっ…  
だあっ…めえ…あんっ♡」

まだだめえ…

あ…もっ…

びと

どぶっ!

どほっ!

ぐぎゅ!

ゴッ!

「寧々さんっ…うあっ♡  
気持ちいいよお♡すっごい  
搾られるみたいにつ…♡♡」

「もっと奥まで…もっと奥に  
欲しいの♡んうう♡」

ちゅ

っ!!  
♡



「はぁはぁ…寧々さん最高だったよお…♡」

「…もう一回出来る…？」

「えっ…もう一回…？  
もう3回もしたし…」

「…今日はもう無理だよ…  
朝ならなんとか…」

もう一回  
出来る…？  
♡

ちゅ  
ちゅっ♡  
ちゅ♡

「えっと…なんとか…  
もう一回…したいの…♡  
あなたと…♡」

「俺もし…したいけど…♡  
歩き疲れもあるし…  
ちょっと待って…  
ちょっと休んだら…」

びゅ  
びゅ♡

びゅ!  
びゅ♡

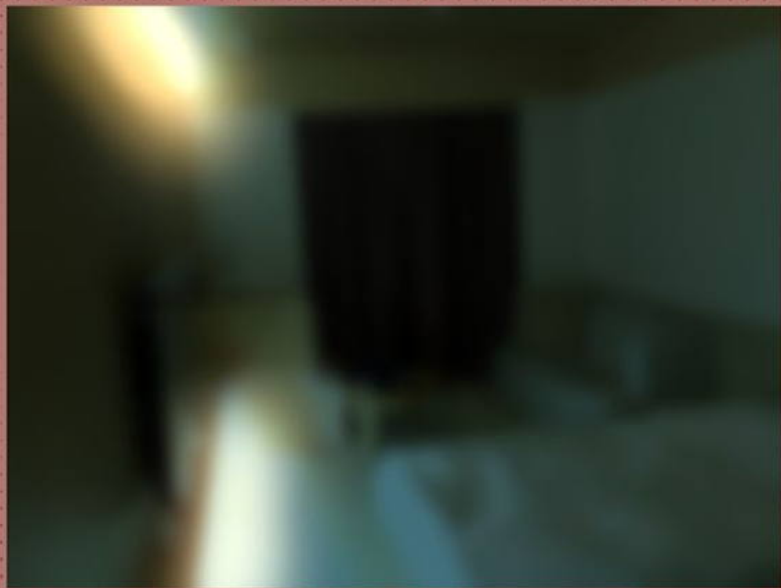
実際、××は寧々からペニスを抜いたあと、  
少し勃起が復活してきていた。

しかし、寧々の熱い体と爆乳に体を伏せたら夢心地で、  
××はウトウトとし始めて眠ってしまうのだった。

「…あなた…ねえ…あなた…××くんっ…」

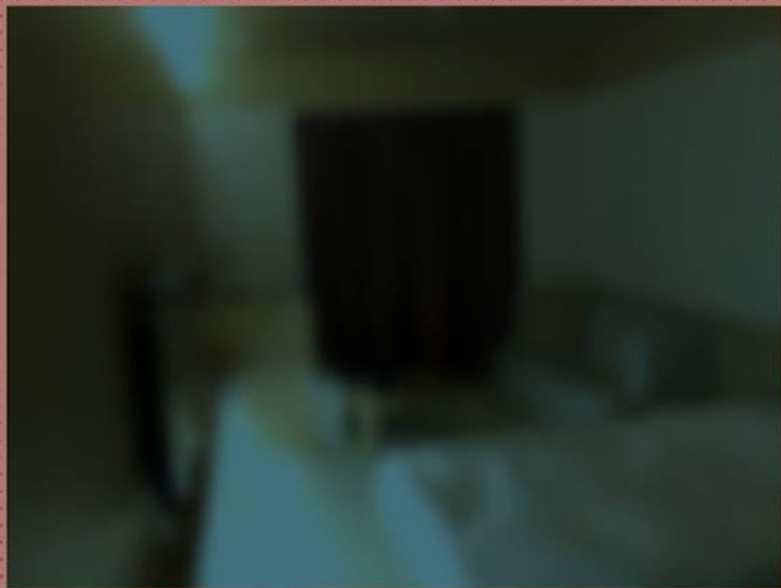
やはりというか、どうしてもというか、  
想定内ではあったものの、××のペニスでは寧々は  
満足する事が出来なかった。

幸せからくる通常の軽イキは何度か出来たものの、  
膣奥、子宮から来るようなとてつもない、  
あの大絶頂はまるで得られない。



…気がつくと寧々は、自分の膣に指を入れていた。

普段オナニーもした事がないのに、  
そうせずにはいられない。



だが寧々の指では当然膣奥には届かない。

親指でクリトリスを撫でながら、奥へと  
中指を進めるが物理的に  
とても届くはずがなかった。

「はぁ…♡はぁ…はぁ♡嘘…」

はぁ!  
ち…!

♡ちっ♡

ぬちい…♡

♡ちっ♡

だが寧々はどこでも何としても  
あの快感を得ねばならない。  
そうでないと…寧々はアレを求めてしまう。  
彼との旅行で一番求めてはいけないアレを…

愛液がどんどん漏れ出てくる。

率々が指を出し入れするたび、  
届かない子宮口付近から疼きが  
どうしようもなく伝わってくる。

「はあっ！はあ！はあ！  
届いて…届いてよ…」

熱い愛液は糸を引いてシーツに、  
浴衣にしみていく。

「どうして…どうして××くんのじゃ…  
届かないの…?!?一番愛してるのに」  
××は寝息を立てて眠っている。



「ひうっ!んんっ♡んう♡」

寧々はクリと膣内の愛撫で絶頂する。

「んっ♡んう♡うう♡」

ムン!

ビク!

ビク!

ビク!

キュン!

まんこから愛液が噴出する。  
クリトリスは肥大し勃起して  
硬くなっているが…。

(だめ…これじゃだめなの…)

寧々是指イキながらも絶望していた。  
この絶頂ではだめだ。

はあ  
はあ  
はあ

もみ もみ  
もみ

ちゅ  
ちゅ

ちゅぽ

くりゅ  
くりゅ

やはりペニスによる絶頂じゃないと、  
それも、あの男の…。

「んっ♡う♡はあ♡はあ♡はあ♡」

ぐちゅぐちゅと水音が再び響く。

寧々は満足出来ないとわかっていながら  
オナニーをやめることが出来ない。

はっ  
はあ  
はあ  
はあ!  
zzz

にに..

「んっ…うっ…うう」  
このままではとても眠れない。  
子宮からくる疼きが、興奮を止めてくれない。

「はあっはあ、はああ…」

だが、その時。

ぐちゅ

ぐちゅ

ぎゅふ

ぎゅふ

ちゃほ

ちゃほ



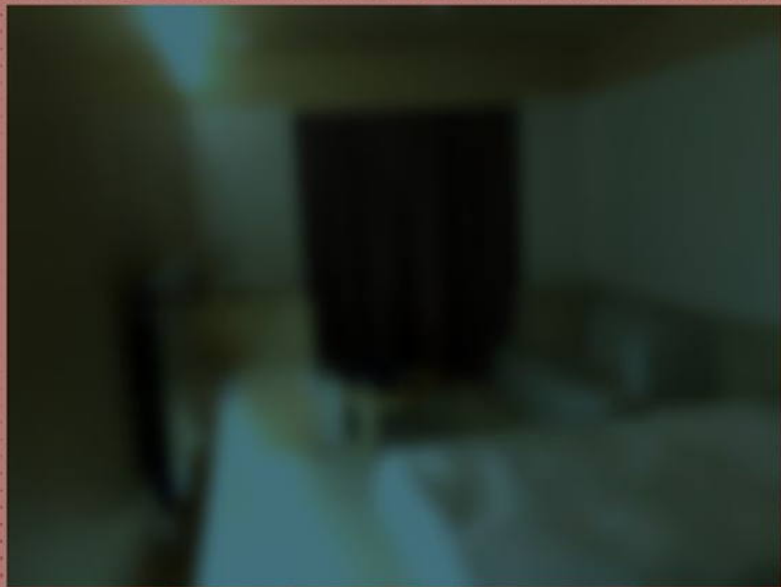
寧々のスマホが震えた。  
毒島からメッセージと動画が送られてきている。

スマホにサムネイルが映っていた。

寧々は、あの男からの動画なんて  
見るつもりはなかった。

だが、そのサムネイルを観た瞬間…  
熱い愛液まみれの指が、ほとんど反射的に、  
無意識にその動画をタップしてしまっていた。

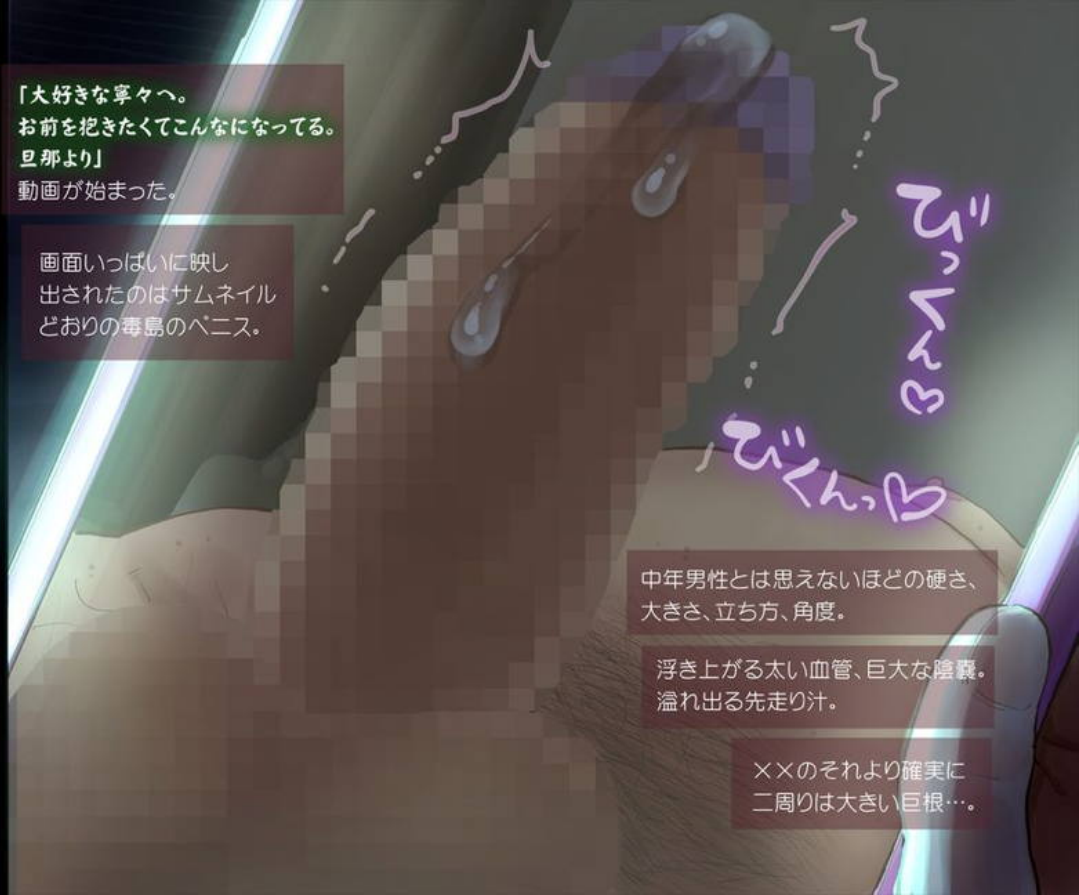
寧々の息が荒くなる。呼吸で胸が上下する。





「大好きな寧々へ。  
お前を抱きたくてこんなになってる。  
旦那より」  
動画が始まった。

画面いっぱいに映し  
出されたのはサムネイル  
どおりの毒島のペニス。



中年男性とは思えないほどの硬さ、  
大きさ、立ち方、角度。

浮き上がる太い血管、巨大な陰囊。  
溢れ出る先走り汁。

××のそれより確実に  
二周り大きい巨根…。



寧々は思わず唾を飲み込んだ。  
瞳孔が開き、彼の隣だとい  
うのに意思に反して、

その動画を食い入るように  
見つめてしまう。



「おちんぼ、こんなにガチガチだよ♡  
今日、寧々を4回も抱いたけど  
まだまだ寧々とセックス出来るよ♡」

「寧々の事を考えてるだけでコレだよ。  
しかも…はあはあ…寧々と  
おまんこしてるって考えるだけで…」



なんと毒島のペニスは  
指も触れず射精した。

中年男性なのに垂直に  
屹立したそれから  
完全に真上に発射。

どぶっ!

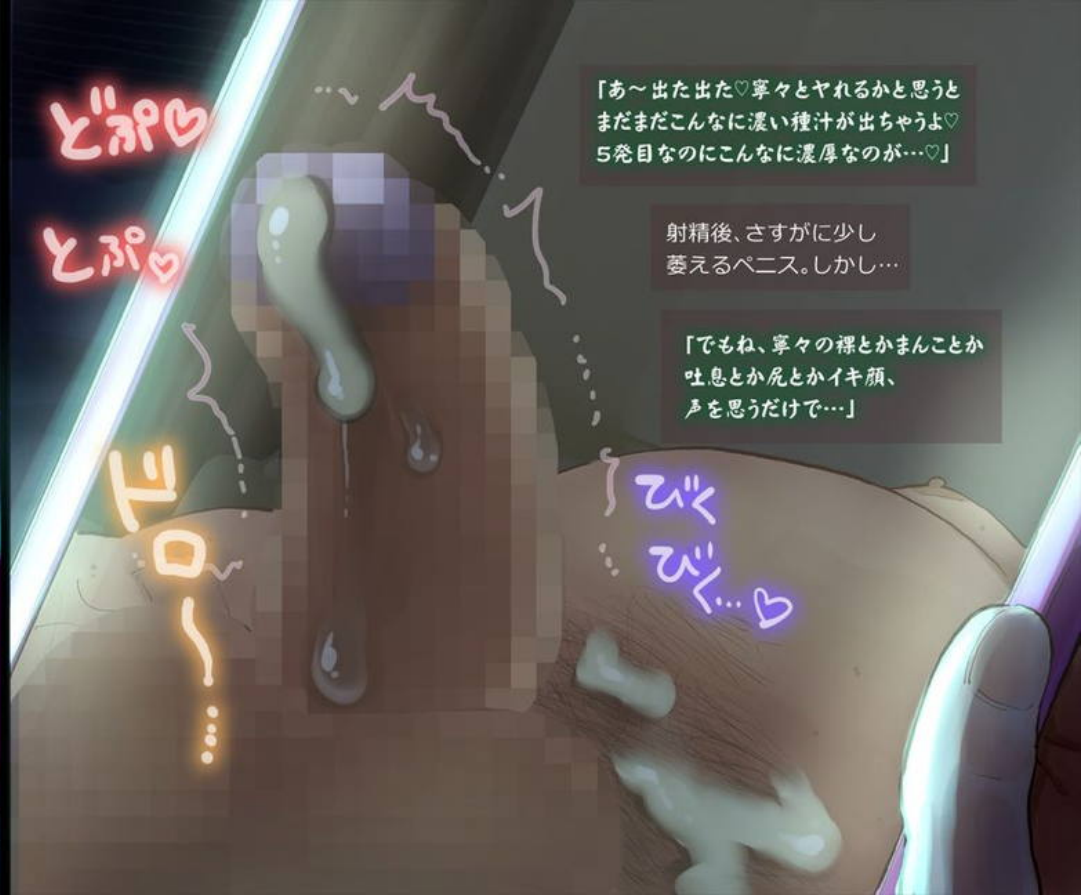
どぶっ!

どぶっ!!!

どぶっ!!!

「うっ♡ああ気持ちいい♡」

寧々はそれを凝視する。  
呼吸が更に荒くなる。



「あ～出た出た♡寧々とやれるかと思うと  
まだまだこんなに濃い種汁が出ちゃうよ♡  
5発目なのにこんなに濃厚なのが…♡」

射精後、さすがに少し  
萎えるペニス。しかし…

「でもね、寧々の裸とかまんことか  
吐息とか尻とかイキ顔、  
声を思うだけで…」



「ほら、すぐに勃っちゃうよ♡  
まだすぐ寧々を抱きたくて  
こんなになってるよ♡」

寧々は唾を飲み込む。

精液の残り汁が伝う  
ペニスの絵面は  
残酷なほど卑猥だ。



「このおちんぼで、  
寧々をたくさん

愛してあげるからね♡  
朝までたっぷりとね……♡」



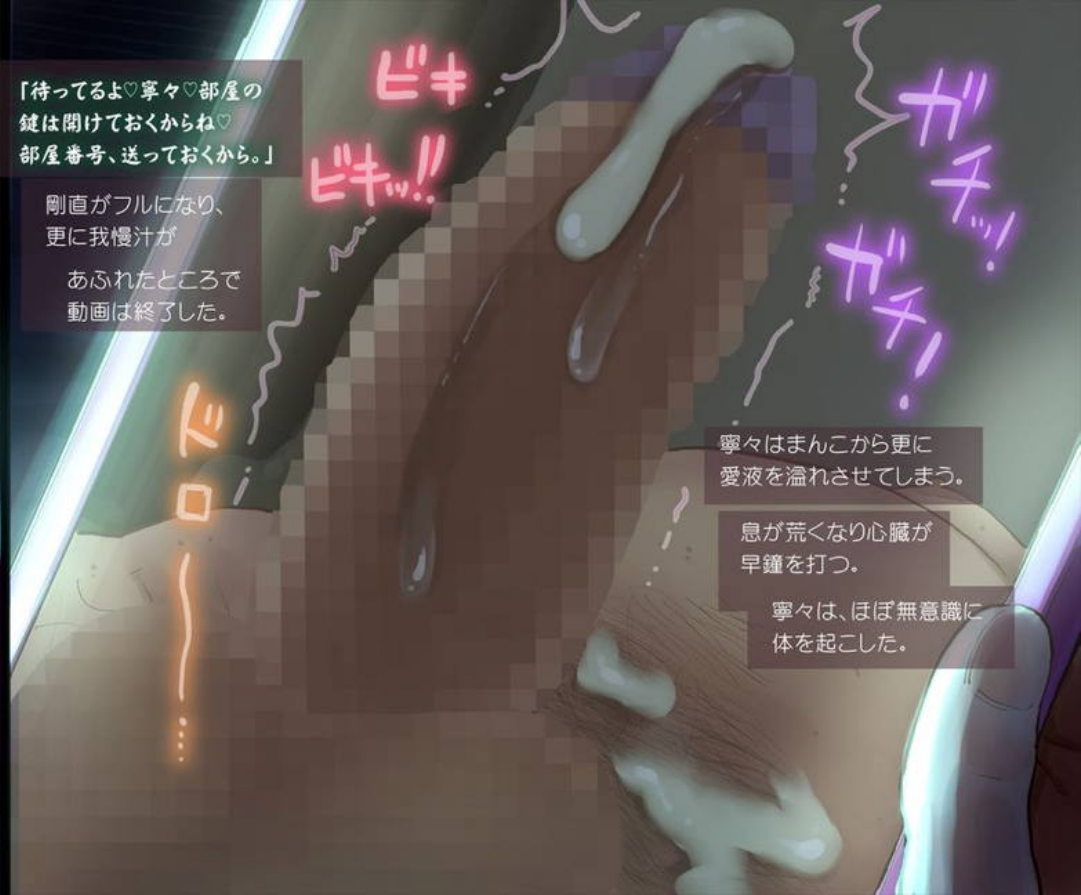
ん...!!!

はあ  
はあ

「待ってるよ♡寧々♡部屋の  
鍵は開けておくからね♡  
部屋番号、送っておくから。」

剛直がフルになり、  
更に我慢汁が

あふれたところで  
動画は終了した。



ビキ  
ビキ...!!

ガチ!!!  
ガチ!!!

ドロ

寧々はまんこから更に  
愛液を溢れさせてしまう。

息が荒くなり心臓が  
早鐘を打つ。

寧々は、ほぼ無意識に  
体を起こした。

「大丈夫…大丈夫…これは新婚ごっこ…」

寧々は衣服の乱れを直して  
下着を履き、浴衣を整える。  
しかし愛液は溢れてショーツを濡らす。

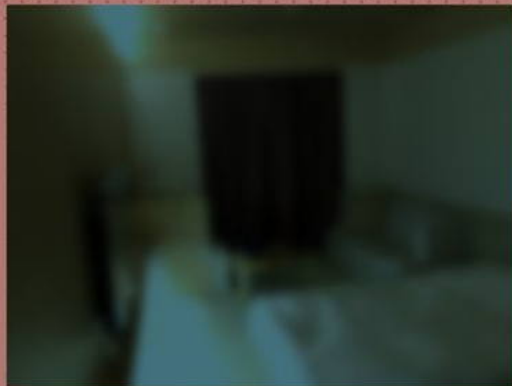
「新婚…ごっこだから…」

××は寝息をたてている。  
寧々は毒島から送られた部屋番号を確認する。

新婚"ごっこ"とはいえ、寧々は絶対に  
向かってはいけない部屋に歩を進める。

深夜のホテルの廊下。その部屋のドアに、寧々は  
手をかけてしまった。

ガチャリと、冷たい音が廊下に響いた。





毒島が、寧々とのセックス  
隠し撮りビデオで  
オナニーしている最中、  
部屋の扉が開く。

あああつ！  
毒島さんっ

はあ！  
いけない  
のにな

気持ち  
いいっ！



!

外の明かりが  
部屋に漏れる。  
そして…



お帰り

お帰り

.....  
おかえり。

…姉ヶ崎寧々が  
毒島の部屋に  
入ってきた。

……  
…ただいま  
……。

おいで  
姉ヶ崎さん。  
可愛がって  
あげるから。

……ちが…  
違うんです…

新婚ごっこ…  
しき来ただけ  
ですから…。


もじもじ

新婚ごっこ…しに来ただけだから…。

一緒に…。横で寝るだけ。  
添い寝するだけです。

…へえ。

ニヤ

A close-up illustration of a character's face, focusing on their eyes and cheeks. The character has dark hair and purple eyes. Their cheeks are flushed with a reddish-pink color, indicated by diagonal hatching lines. There are small, glistening droplets on their skin, possibly sweat or tears. The background is dark, making the character's face stand out.

添い寝…  
するだけ。

へえ。  
まあいいや。  
おいで

じゃあ添い寝  
しよっか。  
腕枕してあげよう。

新婚  
だからね。

ゆしっ...

そう...  
添い寝  
するだけ...

ビキ

ビキ...



全裸の毒島。  
毒島の胸に  
顔を埋めて  
添い寝する寧々。

寧々の息が  
荒いまま、  
5分過ぎ…  
10分が過ぎた。

そうだよねえ、  
寧々は添い寝しに  
来たただもんね。

あくまで新婚ごっこで、  
彼を裏切るような事は  
自分からしたくないと。

そう…添い寝  
だけ…。





おっきいブラだよね。

特注？普通の店じゃ  
売ってない？  
今度プレゼント  
してあげるね。

す...



パン

添い寝するだけ。  
何が起きても  
僕の責任だ。  
まあいいや。寧々は  
良い子だもんね。



1

ショーツびちよびちよ  
じゃん♡意思に反して、  
これはどういうこと？

大丈夫、ゴムは  
着けるからね。

マン汁だくだく  
だけど、どういう事？

…はい…

添い寝しに  
きたんじゃないの？

.....

トロトロ...

おちんぽ  
欲しい？



.....  
い...言えません。

じゃあ  
入れられないよ。

くちっ...♡

添い寝しにきた  
だけですから…

あくまで彼を裏切りたくないの？  
じゃあいいや。こうしよう。

『新妻寧々のまんこに、旦那さんの  
久仁彦さんのおちんぼくください』  
って言ってみよう。

演技で言う新婚ごっこのセリフだよ。  
彼は裏切っていない。

うう…はうう…

やめちゃうよ？

はっ

んっ！！


ぐちっ…♡

し…新婚寧々の…  
おま…ま…まんこに…  
旦那さんの…く…

久仁彦さんの…  
お…おち…  
おちんっ…ぽ…  
ください…

ぬちい

ぬちっ♡



あつ…だからあ…  
新妻寧々の  
まんつ、こに…

旦那さんの  
久仁彦さんの…

おちんぼ…  
ください…

聞こえないよ？



に…っ、新妻寧々のまんこに、  
旦那さんの久仁彦さんの  
おちんぼ、くださいいい…っ！

ブル

ブル…

ブル

ブル…



よしよし良く言ったね。  
ずっと挿れたかったよ。  
寧々も挿れて欲しかったでしょ。

とちゅ♡

あっ…あ…  
はああああ…！

川ぐ…♡

ニゅ♡

そして毒島は、  
腰を前進させ  
寧々の膣に  
亀頭を埋める…♡

美味しいおまんこ、  
いただきま〜す♡

ひっろうろう  
うろうろう!!!

アッ♡  
アッ♡♡

ビクビクビクビク!!!

キゅん♡  
キゅん♡♡

あ～あっただけ～♡♡  
なにこれ♡  
こんな熱いまんこ  
初めてだよ♡

ひあうううううう！

おほ♡ぶるぶる震えて♡  
めっちゃ感じてるじゃん♡  
その顔っ！！

ぶる  
ぶる

ぞし  
ぞしっ！！

びっ  
びっ♡



ひういぎしいい  
しいひいしい♡

チュッ

ト...

フフ  
フフ  
フフ...

トロトロだ♡こんな熱くて  
トロトロでエロエロまんこ  
初めてだよお~♡

何もう乳首  
立ってるじゃん♡  
感じ過ぎだよ寧々♡

はあっ！はあ！  
はうううう！

ビ  
ビッ！

ここっ！この先だよね！  
この先が欲しいんですよ！

進めるよっ、一番良いとこ、  
彼氏クンじゃ絶対  
届かないとこ、いくよお！

めち！めち！

ズググ…!!

ズグ

ズグ…!

はうっ！あああ  
あああっ！

ズドン。  
「ひいひいあうう  
ううううっ!!!」

寧々は、膣奥にペニスが  
到達しただけで絶頂した。

「おおっ!まんこ締まるッ!  
めっちゃ締まってるっ!」

「あはぁあああっ!  
ひいひいああああっ!」

顔をのけぞり、強烈な締めりが  
毒島のペニスを絞る。

「うおすごいですごいっ!!  
こんな締めり初めてだっ!!  
ひえ〜♡気持ちいい〜♡」

ズグウ!!!



ズドン。  
「ひいひいあうう  
ううううっ!!!」

寧々は、膣奥にペニスが  
到達しただけで絶頂した。

「おおおっ!まんこ締まるッ!  
めっちゃ締まってるっ!」

「あはぁあああっ!  
ひいひいあああああっ!」

顔をのけぞり、強烈な締めりが  
毒島のペニスを絞る。

「うおすごいですごいっ!!  
こんな締めり初めてだっ!!  
ひえ〜♡気持ちいい〜♡」

ズグウ!!!

「ひうっ!ひうっ!  
ひいいいいい!」

「まだイッてるの?まだまだ  
これからだよ?新婚エッチ、  
始めたばかりだよ♡」

ひっ!ひいいい!

びく  
びく!!  
びく  
びく

どわ  
どわ♡

「先が思いやられるよ。まあ、  
今度こそ膣奥でイかせて  
あげるからね。もうイッてるけど。  
一緒にイこうねえ♡うう♡」

「ひあうっ、ひいいいいい!」

ギョク  
ギョク  
ギョク!!

「ひうっ!ひうっ!  
ひいいいいい!」

「まだイッてるの?まだまだ  
これからだよ?新婚エッチ、  
始めたばかりだよ♡」

ひっ!ひいいい!

びく  
びく!!  
びく  
びく

どわ  
どわ♡

「先が思いやられるよ。まあ、  
今度こそ膣奥でイかせて  
あげるからね。もうイッてるけど。  
一緒にイこうね♡うう♡」

「ひあうっ、ひいいいいい!」

ギョク  
ギョク  
ギョク!!

「はあ！はあ！はあ！」

「じゃあまずは寧々だけ  
イッてみようか♡」

もう膣奥だけ責めるからね♡  
覚悟してね♡」

ひっ！  
はあっ！  
ひあっ！！

びく！

びく！

ぶるっ！

ニイっ♡

ぬちっ！

「はあ…はあ…はあ…！」

「新婚ラブラブセックス、  
開始するよ〜♡」

ぬち！  
ぬちっ！

ぬち！！



「はあ！はあ！はあ！」

「じゃあまずは寧々だけ  
イッてみようか♡」

もう膣奥だけ責めるからね♡  
覚悟してね♡」

ひっ！  
はあっ！  
ひあっ！！

びく！

びく！

ぶるっ！

ニイっ♡

ぬちっ！

「はあ…はあ…はあ…！」

「新婚ラブラブセックス、  
開始するよ〜♡」

ぬち！  
ぬちっ！

ぬち！！



10分後。

何これ。こんなに勃起してるの  
初めてじゃないの？

ひい！  
ひい  
ひいっっっ！！

ビッ

ムニョ

ムニョ♡

ビッ

エロすぎでしょ。  
乳首もぷっくり膨れて。

ひいっあっ、  
ひいひい！！

これいいでしょ！どんどん  
乳首も感じてきてるっ！

ぬちぬち

ぬち♡

ちゅ♡

あああああっ！  
だめえええ！

もうだめっ！  
気持ちいいいい！

ひいいいっ!  
いいいいい!  
あひあああ!

アッ!  
アッ!  
アッ!

アッ!  
アッ!



あ～締まる締まる♡  
これ最高♡

はあううっ！  
あ～！！

良い声で鳴くよなあ♡  
イキ声だけで  
射精しそうだわ♡

イ  
イ  
イ  
ッ！！

キ  
ッ

さらに10分後。

あっ、はあっ、もうっ  
だめっ、これっ、  
気持ち良すぎてっ、  
あっ！ああっ！

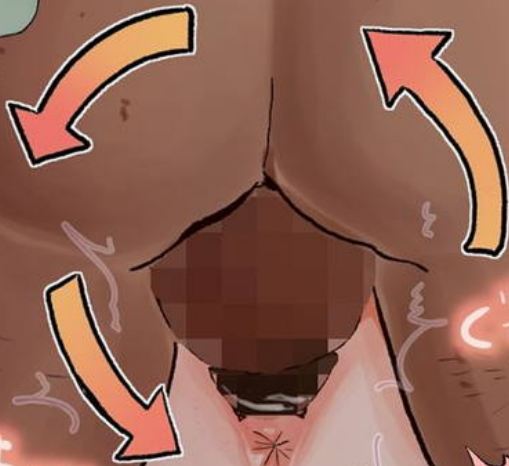
もうひたすら責め続ける  
からねっ♡大好きな寧々の  
1番感じる膣奥、

僕しか届かないところ  
責め続けて  
メロメロにしてあげる！

ザーン！！

ギューン！！

ほらほら♡  
奥グリグリされるの  
いいだろお？

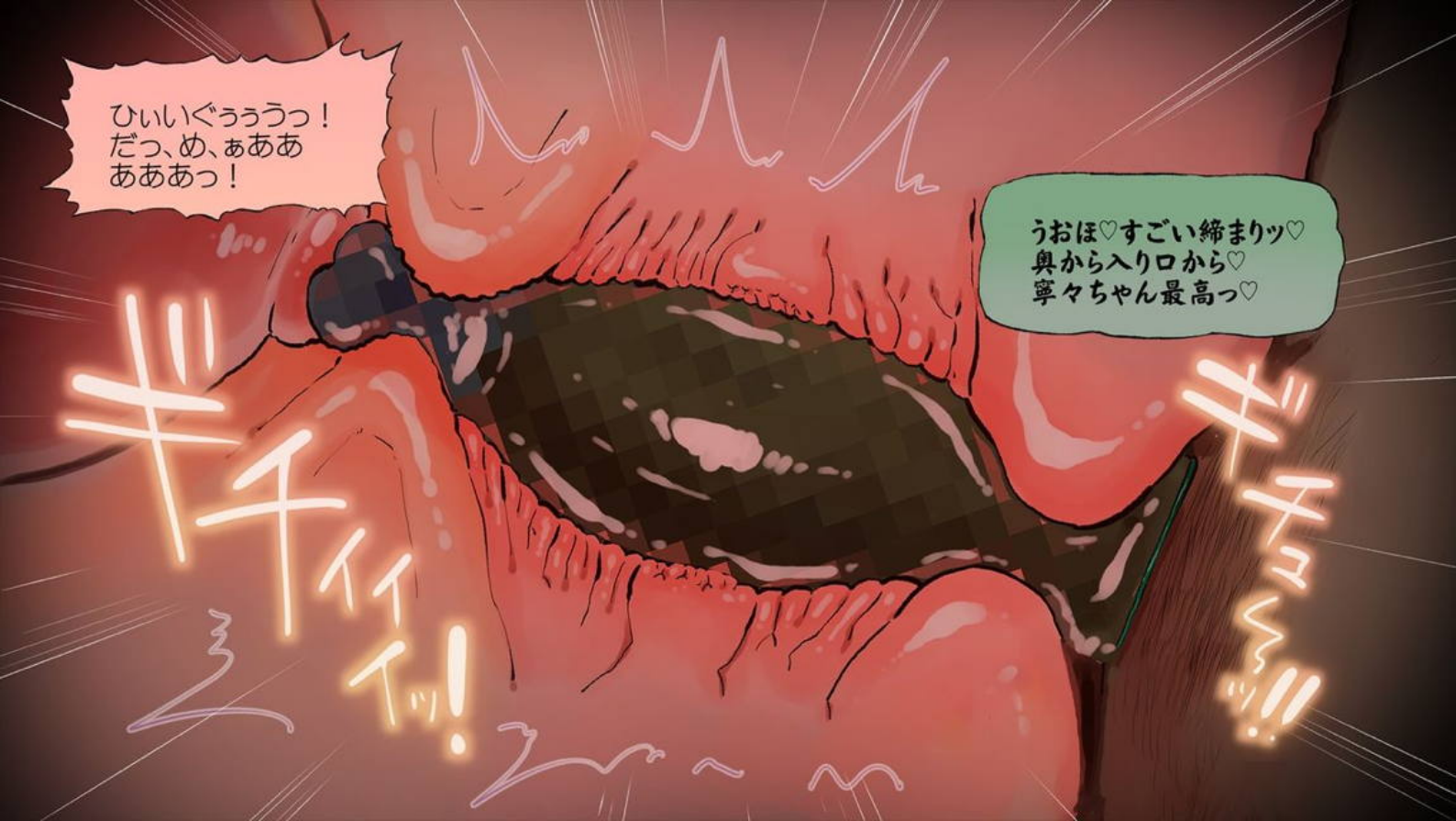


♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

あああそれだめええ、  
またすぐイっちゃううう！  
あはああああつ！



ひいぐううっ！  
だっ、め、あああ  
あああっ！

うおほ♡すごい締まりッ♡  
奥から入り口から♡  
寧々ちゃん最高っ♡

はうっ！はううう！  
あっ！あううう！

おいおいまだイッた  
ばかりでしょお？

この先思いやられるなあ♡  
感じやすい寧々も  
大好きだよお♡

ぢゅ  
ぢゅ

んっ！♡

ぬっ

ぬっ

ぬっ

ヌグッ！  
ツグッ！



20分後。

はあ！は！  
あああああ！

あ～よだれだらけの  
顔で美少女が台無し  
だね♡僕はそれでも  
大好きだけど♡

ほらほら！こういう刺激はどお？  
あ～マン汁また出てるね♡  
これも好き？どんどん開発しよ！



ひっ、ぐううううう！  
らめ、らめえああ  
ああああっ！

はううーはあ！  
はああ！あはあ  
ああああ！

もうイキ過ぎて完全に  
おかしくなってるねえ♡

まっれえええ、ひまっ  
イッれますからああ、  
あひあああああっ！

ドキュッ!

ドキュッ!!

ドス!  
ドス!!



はひいあぐう  
うふうう  
あああっ!

ガイン! ゲツ

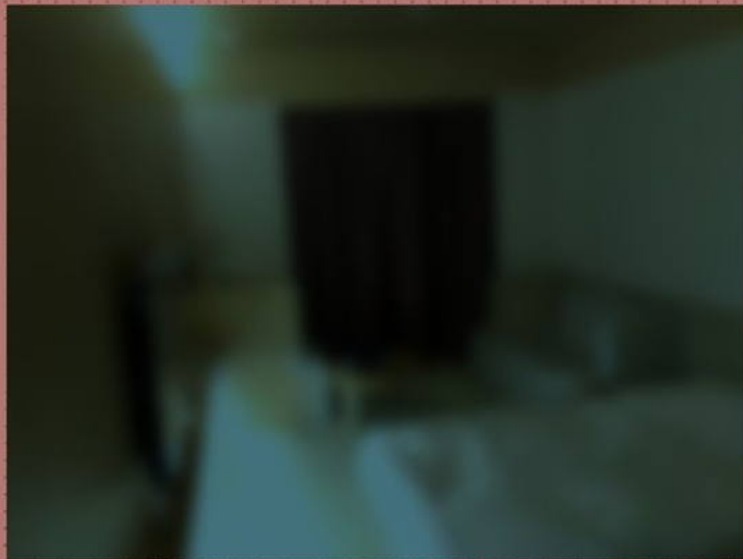
グニ!

グニ!

グニ!

最高だよ寧々♡  
大好きだよお♡  
もっとイッていいよ♡

そこから30分、寧々は途方もなく  
絶頂させられ続け…。



僕ももうイツちやおうかな！  
一緒にイこうか寧々♡  
射精の時、奥でビクビクするの  
寧々好きだよね！アレでイクよっ！


はぁあっ！あぁあ！それっ、  
それだめえっ、今あっ、  
絶対にダメええええ！

一緒に気持ちよくなろうねっ！寧々のとろとろまんこで精子お漏らししちゃうからね！

キッポッ

キッポッ!

ひあああっ！  
だめ、だめですう  
うう！いまは  
らめええええ！



ほら！1番奥で気持ちよくなっちゃうよ！大好きな寧々のドスケベまんこでイっちゃうよ！

ぶる  
る

ぶるん

速いあいいあ…！  
そんなにひいい  
動かれたらあああ！

寧々っイクよっ！  
一緒にイこっ♡  
出るよっあああ！

イッてますうう、  
もうイッて、  
あああああっ！

ビク

ビク!

ビク!



おうっ！おう！おおお  
おおおっ！ぐおおおっ！


はぐううううんっ！  
はあっ！あああ  
あああっ！

ドビュ！ドビュ！ゴビュ！

ほらっ寧々っ♡感じろっ♡  
亀頭がビクビク膨れてっ♡  
寧々まんこの1番奥で  
ドバドバ精子出してるっ♡

あっ、ああああああっ！  
ひああああああああっ！

びく  
びく  
びく  
びく



おほおお♡うぐっ！  
すごい締めりだっ…！  
こんなに締まるまんこ  
初めてだよっ…♡

あはあぁ！  
あううう！  
はぁあぁあ！



んふ♡大好きな寧々に…  
この状態で追い打ち  
してあげようかな♡  
いくぞっ♡

パン  
パン  
パン

ひっあっ  
ああそれ  
ダメっ!

なんか  
漏れちゃっ…!

ま  
ご  
やっ…



あ〜っダメっ!

パン  
パン  
パン

パン  
パン

パン!

出ちゃっ!! あ〜!!

だめ〜!!

うおっ?! おおお  
おお?! これは?!

はううっ! ああ  
ああああ……!

潮噴いてるじゃん♡  
寧々ちゃん♡ そんなに  
気持ち良かったのお?

あああああああ、  
はあああ、ああ  
はあああああ!

あ～あったかい…♡  
寧々の潮？おしっこ？  
浴びれるなんて♡

あああああ…！

快感で潮噴きまで  
するなんてね♡  
いよいよドスケベ  
変態女子○生だね♡

あうう…はああ…  
そんな…こんな  
つもりはあ…

じょ

じょ

じょほ

ぢょほ



じよ  
じよ  
じよ  
じよ  
じよ

ほか  
ほか

大丈夫褒めてるから♡  
最高だよ寧々♡  
こんなエロエロな  
寧々が大好きだよ♡

ああっ！  
はっ…あうっ！  
あああああ…！

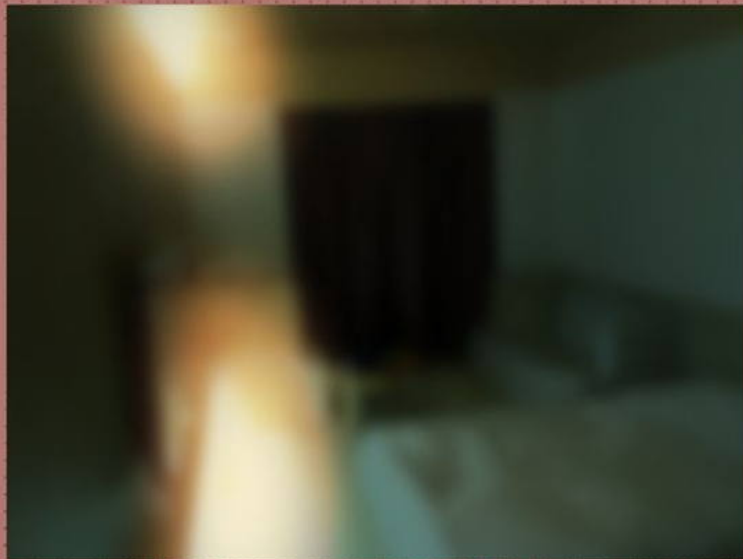
ぬ  
はっ  
はっ  
はっ  
♡

毒島は雑に寧々の潮?尿?の始末をして  
部屋の照明を変えた。

毒島の絶倫の精力。  
当然セックスは終わるはずがない。

抜かれたペニスは硬直したまま。

すぐに新しいコンドームを装着して  
10秒後には寧々のまんこに再挿入される。



午前3時。

これも寧々の  
吐息と乳が当たって  
最高の体位だよなあ〜♡

ふあああん！乳首っ…  
そんなにペロペロしちゃ  
やあああ…！

ぬちっ

ぬちっ♡

寧々ちゃん  
キスしよう♡

…キスはあ…絶対  
ダメですっ…たとえっ…  
新婚ごっこでもお…  
絶対しません…はうろう！

ぬちっ♡





こんなに何時間もセックスして…  
もう何十回も繋がってるのに?!  
僕も寧々の事大好きなのに?!

LO LO  
LO♡

いや…あなたと  
キスなんてしません…

あ〜♡いつか寧々ちゃんと  
ベロチューしながら  
射精したいなあ♡  
中出しもしたい♡

ちゅ〜♡ ちゅ♡

ちゅ♡

やっ…あああ  
あああ…！  
んああん…！

イヤ

午前4時。

出すよ寧々っ！  
出すよ！出る！  
ああああ！

ドズ！  
ドズ！  
ドズ！

はあっ！  
あっ！ああ  
あああ〜っ！！

ビュ！  
ビュ！  
ビュ〜っ！

午前5時。

あ~やっぱり  
寝バック最高だよな~♡

寧々のデカイ尻を  
堪能しまくりながら  
弱点も突ける♡

ドズ!  
ドズ!  
ドズ!

あっ、ああああっ、  
それえ、その角度っ、

あああああっ弱いのが、  
んあっ、イっちゃうううっ!

びくっ!

びく

びくっ!!



あひい、あひい、  
あああああ！

あひい

ドビュ!

ドビュ!

おほお♡イキ狂ってる  
寧々まんこで  
射精するの  
たまらんな～♡

はあ…  
はあ…  
はあ…

ぬんぬん

♡…♡

ト  
ト  
ト

あ〜♡  
出た出た♡

午前6時。

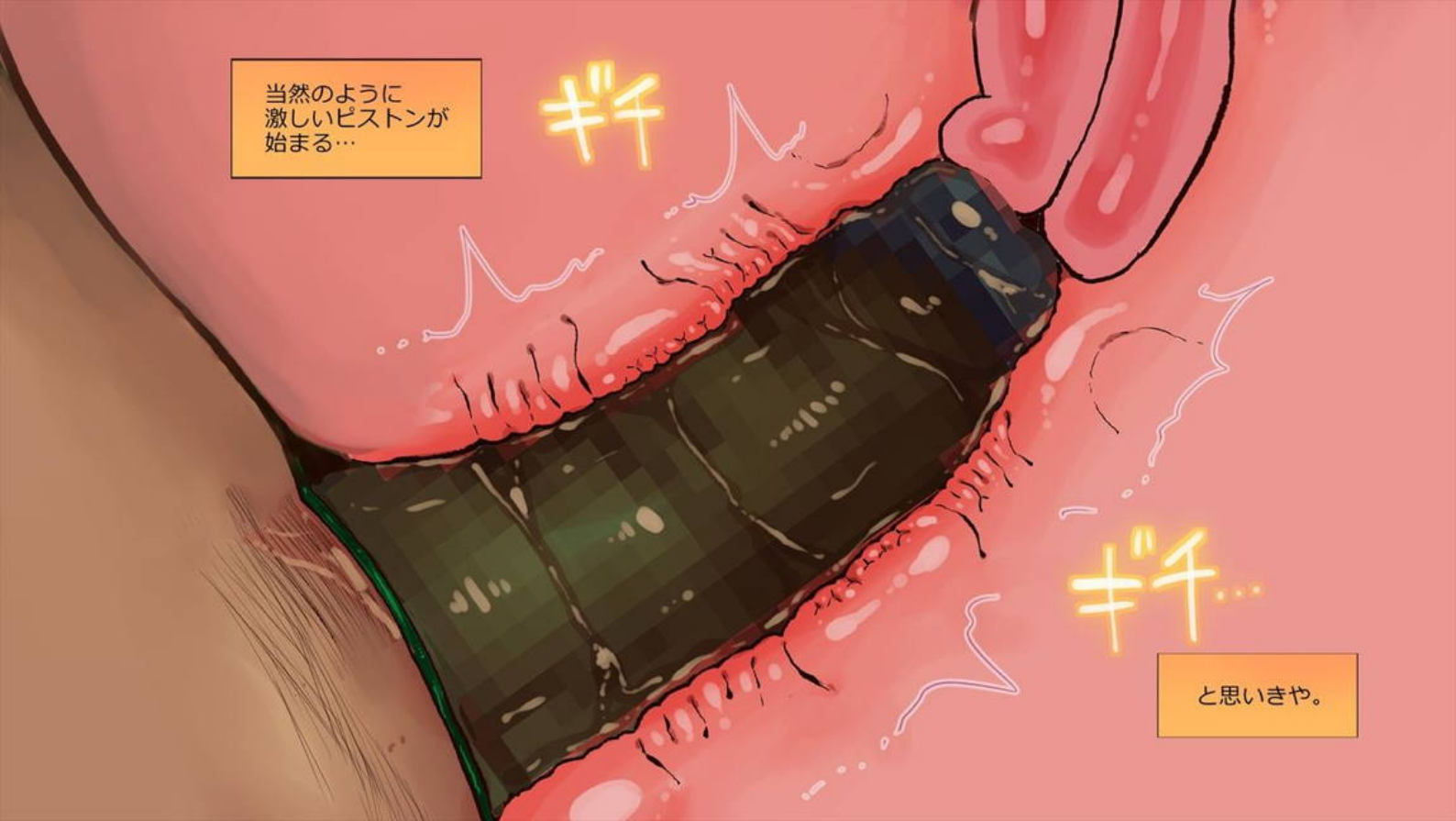
夜も明けてきてしまった。  
毒島は、寧々を騎乗位の  
ポジションに持ち込む。

はあっ、はあ、  
はあ…

みしっ♡

ぬちいっ♡♡

膣奥にめり込む  
ように、亀頭が  
子宮の入り口を撫でる。



当然のように  
激しいピストンが  
始まる…

キーン

キーン…

と思いきや。



.....?

(.....えっ...?.....)

し——ん...

.....?  
寧々ちゃん、  
どうしたのその顔♡

えっ、あ、.....  
何でもない...  
です...



っ!!!

っ!!!

んほ♡  
相変わらず  
凄い締めまり♡

あうっ、  
ん……………  
いやあっ…！

すごい締まるじゃん♡  
これだけでも僕は  
気持ちいいなあ♡

ニヤッ…

ビク  
ビク

ギク  
ギク

はうっ！  
うう…！？

(何で…！？  
何で毒島さん  
動かないの…！？)

ぷる…

ぷる…

オチ  
…

オチ  
…

いつも一心不乱に、  
縦横無尽に、  
的確にリズムカルに、

職人芸の如く  
膺を愛撫しピストンした  
毒島が全く動かない。

5分後。それでも  
動かない毒島。

どうしたの？これ。  
トロトロのマン汁  
溢れてきたよ♡

しー…ん…

ぷるん

びく

びく

はあ…ああ  
ああ…う！

まんこの締め付けも  
凄いい。ひひっ♡





うあ…うっ!

動いて欲しい?

ひうっ!う…

フム…  
フム…

寧々は待ち望んだ  
その言葉に膣を  
締め付けてしまう。

図星なんだ♡  
じゃあさ、寧々ちゃんが  
動けばいいじゃん。

んっ…あ…それは…

動けないの？自分からは？  
新婚ごっこでも彼氏を  
裏切りたくないのか～♡  
楽しめばいいのに♡

ギ4

ギ4…

ヒッ♡  
♡

トロトロ…

.....

僕は絶対動かないからね。  
これでも気持ちいいからね。  
寧々ちゃん、動いてみてよ。

そんな…。  
…そ…それは…  
出来ません。

自分で動く  
気持ちいいよ。  
自分の弱点は自分が  
一番知ってる訳だし。

ひあつ、ああつ…！  
でも、出来ません…



さらに5分後。  
毒島はやはり動かない。  
相変わらず流れる寧々の愛液。

ひう…ううう…

ブル

あ～寧々のまんこ  
気持ちいい～♡  
エロ愛液も熱くて最高～♡

キュン

キュン…

あ…あ…  
はうう…

もうこのままでも  
いっかな〜♡このままでも  
気持ちいいもんな〜♡

ブル...

はうっつ...  
あ...ああ...!

ブル

ブル~!!

(動いちゃ...  
動いちゃダメ...  
動いちゃ...!)

あ…  
あ…!

(動いたらダメっ!)

ブル  
ブル

ギョッ!

ギョッ

ブル!

(でもこのままじゃ…  
ムズムズしたまま…っ!)

んう...う...

うう!

(動いちゃ...

ダメ...

ダメ...

なの...

に...)

ブル

ブル

ブル

ひく

キョソ

ひく

ギョキッ!

.....!!



ぬる

ぬる  
ぬる














An anime-style illustration of a woman with her hair in a bun, wearing a white top and blue shorts, kneeling on a bed and massaging a man's back. The man is lying on his stomach, smiling. The scene is lit with warm, soft light from a window. There are several speech bubbles and sound effects around the woman.


はうっ、あ、  
ああああっ！

ああっ！

くちゅ!!  
くちゅ!!  
くちゅ!!

くちゅ!!

くちゅ!!



はうっ！  
あああっ！

あああ！はうっああ  
あああああっ！！

ぐちゃ！ぐちゃ！  
ぎゅぶ！ぎゅぶ！！

じゅぶ！

ぐちゃ！

じゅぶ！

じゅぶ！

率々の腰の動きが激しくなる。  
一番気持ちいいの良いポイントに  
毒島のペニスを当てて、  
自分から激しく腰を振る…。

ああっ、あ！きもち、  
っ、いいっ！はあ！

おおおお♡いいねえ！  
いいよお寧々ちゃん！  
最高にエロいよおお！



くちゅっ

あ〜この締め付けっ♡  
まんこ！マン汁っ！  
マン肉のうねりっ♡♡♡

あっ、はぁあぁあっ！  
駄目ええ…ここ…  
もう、すぐイッちゃう  
…っ！はぁ…！

くちゅっ！

くちゅっ！

うほお♡寧々ちゃんが  
僕のちんぽでオナニー  
してるみたいだねえ♡



ああっはああああ、  
ここ…ああ…  
気持ち良くてええ…！

はぁぁぁ！もう駄目え  
イクぅう！あぁぁあぁっ  
イツくぅうううっ！

あ〜エロいよ寧々っ！  
エロすぎるよっ！その腰つきっ！  
思いっきりイツちやいなよ！

ブル  
ブル

ビク

ビク!!

ぐし ぐし!

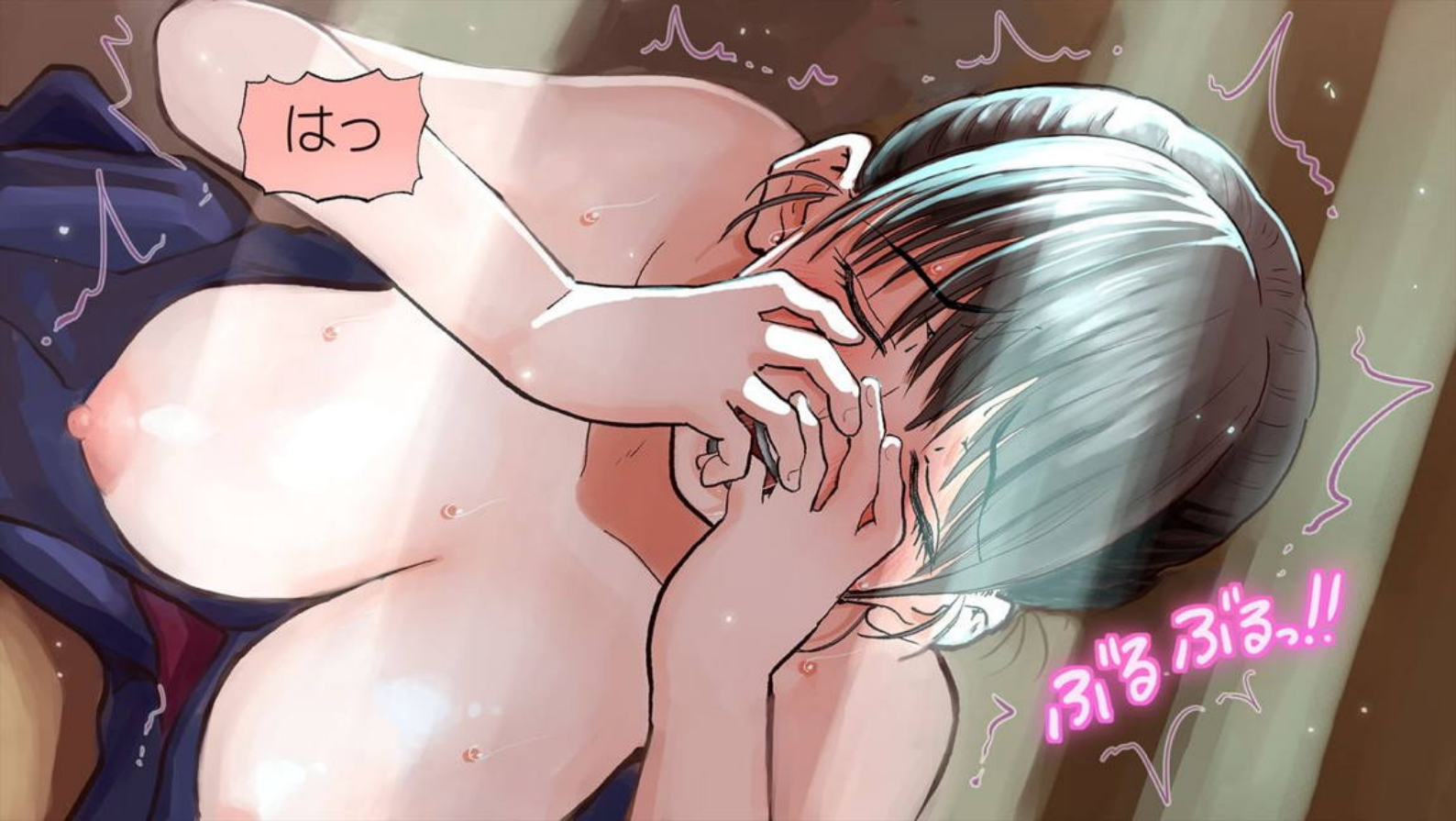
がし  
がし

じ+ふっ!

じ+ふっ!

あぁぁぁあ、イクっ、  
イクっ、イツちやううう！  
はぁぁぁあぁあ！





はっ

びるびる!!

ひいいっ!!  
あ! あああ! ひいい  
あああああつ!!

びくっ!

びくっ!


びく!

ぶる

ぶるぶるっ!

ぶるっ!!

おっ♡おおお  
おおっすごい  
締めまりっ…!!



あつ! ああああ  
あああああつ!!

くうっ  
出るっ♡

ギッ  
チッ

ギッ  
チッ  
イイイッ!!

はうっ!  
あうっ!

ビク...! ビク!

あ〜♡  
気持ちいい...♡

ビク...♡

ビク♡

ビク...♡

ああっ...  
はあああ...

んお!?

あつ…  
あああああ…!

おいおい♡また  
お潮お漏らし  
しちゃってるのお?

しょろ  
しょろ

しょろ  
しょろ

んお  
んお

じわ  
じわ…

そんなに自分から  
動くのが気持ち  
良かったのかな？

スケベな寧々ちゃんっ♡

はあ…はあ…  
はあ…！

あ〜ほんとエロすぎて  
たまんね〜な♡

一旦外して  
ゴム替えて続きを…

かっく

くちゅっ

!?



んっ...

ん...

ん!

←ちゅっ

←ちゅっ

←ちゅっ!

あれ?



グイッ

グイッ

あっ

あっ!

あっ

あっ!

ぬちゃっ  
ぬちゃっ

ピョッ

…快感に  
堕ちしまった  
かあ…?♡

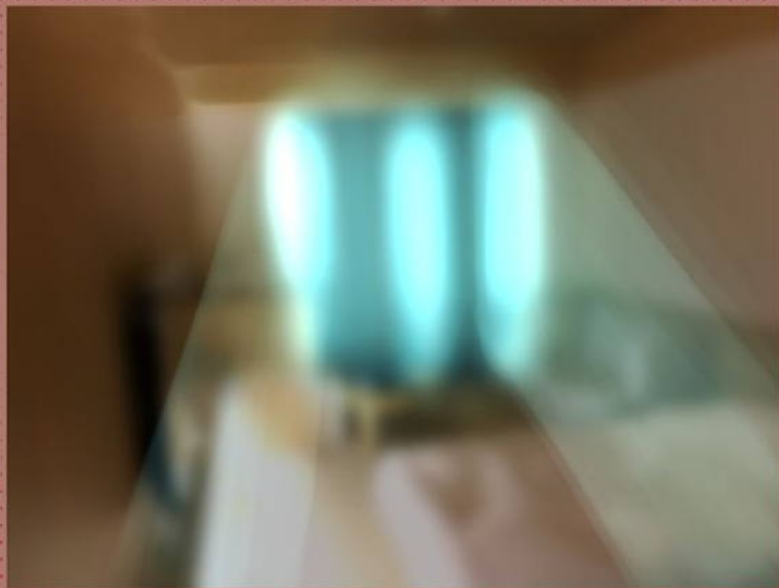
ピョッ

午前6時40分。  
寧々は再び腰を  
振り始めた…。

午前7時。

寧々はキスこそ受け入れていないものの、  
毒島と対面座位で激しく結合していた。

お互いがお互いを求め、お互いが  
腰を振りあって貪欲に快感を求める。



「あ〜痒々っ！気持ち良いよ！  
最高に気持ち良いよ！」

「わ…私もお…  
すごく気持ちいい…」

「ここ良いだろっ！  
ここ！さっき自分で  
やってたところ！」

「はあああああっ！  
良いっ！良いですっ！  
そこったまらないっ…はうっ！」

あああああ、  
スゴッ…！  
あ…そっ…！！

ドズ

ドズッ！

ガッ  
ガッ  
ガッ

ガッ

又ッッ！

又ッッ！

「寧々が自分から腰まで  
振ってくれるなんて感激だよ！  
時間があればこのまま  
ずっと愛し合いたいよ！」

「あうう…もう  
行かなきゃあ…  
ああああん！」

「んお♡腰の振りが激しく  
なったよ♡最後だから  
楽しもうしてるね♡」

「んあう！あああつ、  
毒島さんっ…  
気持ちいいっ…！」

そこま…!!  
一番弱いところ…!!  
ああああ…!!!

ドズ! ドズ!

グワッ

グワッ  
グワッ

ズキ♡

毒島は容赦なく腰奥を責め、  
寧々も自分から腰奥と弱点を責める。

「よーじやあ今日最後に  
一緒にイクよっ！  
寧々の一番気持ち良い  
ところで射精するよ！」

「はぁうううっ、あああああ！  
イクっ、イクます！私も  
イクらうううっ！」

「イクよっ！寧々！  
ここだろ！ここがいいだろ！」

「あああ、そこだめええ！  
そこっ、そこっ！！」

「おおおっ！  
寧々！寧々っ！  
出るぞっ！！

ゴム越しても  
精子感じろっ！！

あああ  
イクらうううっ！！

ドクッ！  
ドクッ！

ググッ！  
ググッ！！

「あああああっイクますっ！  
毒島さんっイクますうううっ！！」

「うおおおっ！ゴム出しでも  
気持ちいいっ！！  
精子すごい出てるぞっ！」

「はあああああ  
んううう！  
んうあああっ！」

「ああああっ！ああ！  
おちんちん膨らんでっ、  
…あはあああ！ああ！！」

あっ！！あっ！！  
あああ～っ！！  
おちんちん

「うおおおっこの締め付けっ！！  
たまらね～♡寧々のまんこは  
このちんこのビクビク  
大好きなんだなっ♡」

「はうううっ！ひっ！  
ひいいいあ〜っ！」

寧々は快感のあまり  
強烈な締め付け。  
そしてまた潮を噴いてしまう。

「うおおお♡締めすぎだし  
漏らしすぎっ♡あったけ〜♡  
ドスケベすぎる♡」

「はううっ！はう！あっ！  
ああああ！はあああ！」

「あ〜まだ射精とまらねえよ♡  
こんなエロいセックス  
初めてだぜ…♡」

あっ！あああ  
はあああ〜っ！！

ドクッ  
ドクッ！  
ドクッ…！！

チィィィ！！

プンッ

アアアア…

毒島の巨大なペニスが  
引き抜かれる。先端には  
大量の特濃精液。

「はうっ！あう！  
あう…ああっ…あ…」

「すげ～締めり♡最高の  
ドスケベまんこだ…今日これで  
終わりは惜しいな～♡」

ぬぽおっ…♡

あ…！あ、  
はあう…ああ…

「あうっ！あう！  
はあ！ああ…」

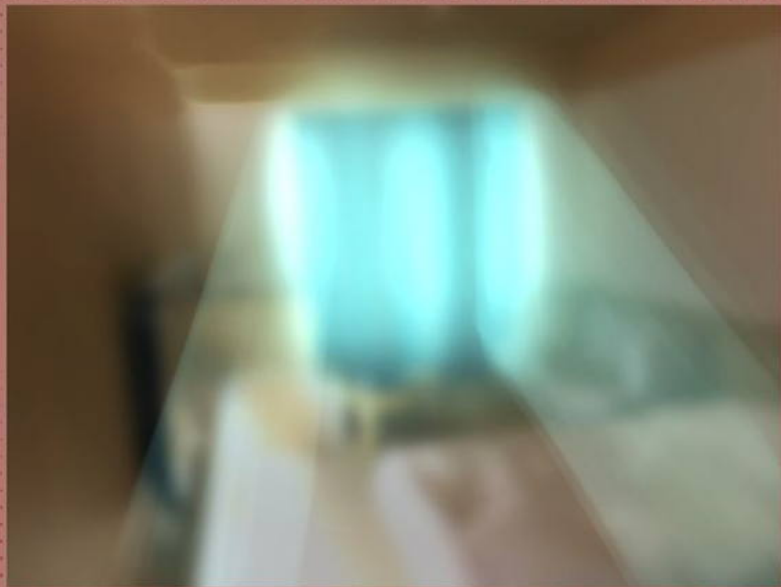
「満足できた？新妻寧々ちゃん♡  
最高に気持ちいいセックス  
だったね…♡好きだよ…寧々♡」


ガチ…  
ガチ…



寧々と毒島は、一晩に及ぶ  
セックスを終えて、そのまま重なり合う。  
寧々は気持ちよさと疲労で  
ウトウトしてしまう。

夜通しぶっ続けのセックス。  
重なる汗だくの体…。





あつ…だめ…  
このまま寝ちやいそう…

ふふふ。寧々のカラダ、  
ふわふわで気持ちいいよな。  
こうしてるだけでも幸せだ。  
キスしていい？

ダメですう…ああ…  
部屋に戻らないと…  
んん…

好きだよ…寧々…

あ…んん…  
キスはだめ…っ

08:00

あんっ、あっ、あ、  
あっ、あっ！

ああ～♡あったけー♡  
やっぱり寧々まんこ最高～♡

はあっ、ああああ！  
気持ちいいっ、あんっ、  
あああっ！

ゴム越しでも伝わってくる  
この感触っ♡♡うう♡  
出すぞっ！

09:00



あっ、はっ！ああああ  
あああああっ！

そうなのっ…  
ごめんなさい。  
今っ、朝のお風呂に…

入ってて…気持ちよくなって…  
また入り直してて…  
少し遅れるね。ごめんなさい…！

ぐうっ♡

ビュルッ

ビュルビュル

ぐちゃ

ばちゃ

ばちゃ

ビュ!!

大好きだよっ、  
寧々さん！

ふるん

ん？うん…私も大好きだよ…  
でももう少し待ってて…  
お風呂…気持ち…よくってえ…！

09:30

なんだかお腹痛く  
なっちゃって…  
おトイレ…。うん…！

…ごめんね。電話切って。  
きもちよ…気持ちわ…く  
なっちゃって…あんっ！

ちるるる

ちるるる



びく

びく!!



ドズ! ドズ!  
ドチョ!  
ドチョ!

ビュッ! ビュッ!  
ビュッ! ビュッ!  
ビュッ! ビュッ!

はうううっ!  
あう! はっ! う!  
あああああ...

んっ...ごめんなさいっ...  
ちょっと...すごく...  
気持ち良っ...!

全然...こんなの初めてで...!  
トイレから...出られ  
なくて...ああっ!!

10:15

ごめんなさい。  
まだおトイレ…。

良いつ…！  
すごく良いのっ！

ズボ  
ズボズボッ！！

ぶるん

うん、もうすぐ  
行くからああ…

でもかなり良く  
なってきたから…！

ぶるんっ



ズボッ!

チュボッ!

どちゅっ!!

どちゅっ!!

もう、ダメっ、気持ち  
良すぎてえへええ!



あああああ！  
イクううう！

イツちゃう！  
イツちゃ…！

ドキッ！  
ドキッ！

ドキッ！  
ドキッ！

ドキッ！

ドキッ！  
ドキッ！

出すよっ！寧々まんこで  
射精するよお！出るっ！

ひぐううう！  
いぐううあううう！

びく  
びく

はあああつ！  
あああはああ～！！

びくっ！！

ああああ出てる  
出てる出てるッ！！

うひひっ♡はああ～♡  
気ン持ちええ～ッ♡

ビュッ！

ビュッ！  
ビュッ！

ビュッ！！  
ビュッ！！

11:00

「ああ～♡気持ちよかった～♡もう昼か？」

「ひぐっ！はう…はううっ…！」

「結局4時間も”追いセックス”しちゃったからな。

そんなに彼の元に戻らないで

僕とセックスしたかったの？

そんなエロエロな寧々も大好きだよ♡」

「あっ…はあ…はあ…私…何十回もイって…

こんな時間までセックスして…！

はあ…彼に嘘までついて…あうっ…」



「一晩でゴム一箱消費しちゃったよ♡  
まだ一箱あるけどやる？」

「あっ…あぁそんなに…っ…」

「まあ時間的にチェックアウトしないとだから、  
さすがにもう彼のところに戻ってやって」

「はい…」

「大好きだよ、寧々♡」

「……………気持ち……………良かった……………」

毒島は布団を片付ける。

まだペニスはガチガチに勃起している。

寧々はそれを視界に入れて、  
思わず唾を飲んでしまう。



寧々は大急ぎで女湯に向かい、  
シャワーだけ浴びた。  
そしてようやく部屋に戻る。

「寧々さんっ！大丈夫？」  
××が気付いて走り寄ってくる。  
実にチェックアウトぎりぎり。

「ごめんなさい。心配かけて…。  
私なら大丈夫だから。」  
「あんまり長いから心配したよ。」

「…ごめんなさい…。  
私も楽しみにしてたんだけど、  
今日の予定ずれちゃうね。」

「そんなことはいいよ。  
寧々さんが体調無事なら。  
行こう？チェックアウトしないと。」  
「うん…。ごめんなさい」



××は、さすがに違和感を覚えていた。  
妙に漂う愛液の匂い。

今朝、体調が悪いと言うのに  
何度も入り直していた風呂。

しかしまさか毒島に抱かれて、何十回も  
イカされているとは思ってなかった。



予定より遅れてスタートした箱根旅行2日目。

湖観光の途中、トイレに行くと言った寧々は、  
またしても20分ほど帰ってこなかった。



「…っ…ま…まさか続いているなんてえ…！」

「誰も終わったなんて言ってないよ？  
僕も箱根旅行2日目だからね♡寧々も  
ラブラブ新婚セックスの続き、望んでたでしょ？」

「んっ、あああう、ああ…！」





小声ながらも、二人は会話しながらセックスをしている。

「僕のちんぼ、いいでしょ？  
彼氏クンのより良いでしょ？」  
「そんなっ、事っ、言えないですっ」

「もう認めよう。彼氏クンのちんぼじゃ  
ココ、絶対届かないんだか…らっ！」

「はうううっ！」

毒島は寧々の膣の最奥、  
子宮入り口にカリ首を  
当てるように撫で込ませる。

ズッ  
ズッ!

あゝあゝ!  
あゝあゝあゝ!!

ゴッ

ブッ!!

ゴリ!!

「これも絶対出来ないじゃん♡  
もうちんぼ的に僕とのセックスの方が  
気持ちよくなるに決まってるじゃん」

「か…彼とは…心の  
つながりがあ…ひんっ」

「そりゃ好き同士のセックスは  
気持ちいいでしょ。だったら  
寧々ちゃんが僕の事  
好きになってくれればどう？」

「ひうっ…?!んっ…う?!?!」

寧々はそれを想像し、膣を一瞬で  
締めてしまう。そうなった場合、  
想像を遥かに超える快感に  
なってしまうのでは。

ゴイ  
ゴイッ!

ゴニ!  
ゴニ

チュブ

ブチュ

あ! あ!  
ひうっ!  
あ!  
あああっ!!

「でも私は…××くんの方が  
あなたよりも全然好きですからっ…！」  
「まあそれはいいよ。僕が寧々を本気で  
好きにさせちゃうからねっ♡」

毒島は最奥の弱点を責め、  
子宮を龟头冠…  
カリで存分に撫でる。

「ひいあいいいっ！それだめええ！」  
「良いだろっこのちんぽっ！  
このセックス！彼氏とどっちが  
いいのかハッキリ言ってよ♡」

ぐいん♡

ぐいん♡

ぬる♡

♡

ぐりっ！  
ぐりっ！

あっ！あっ！あ！  
ぐりっ！ぐりっ！

ぐりっ！  
ええええええ  
!!



「はううっ…彼が…  
彼のおちんちんの方が  
…っ…好きですっ…」

「バレバレの嘘をつくんじゃないっ  
こんな奥まで届くのはどっち？  
こんな連続して硬いままの  
ちんぽはどっちなの？」

「うんうううううっ！  
おっ…おちんぽはあ…  
毒島さんの方がすごい  
ですっ…良いですっ!!!」

「セックスもだろっ！こんな事彼は絶対  
できないだろ！寧々の一番気持ちいいやつ、  
出来ないだろっ！どっちだ？  
どっちのセックスが良いの!？」

ズズ!  
ズズ!

じゅぽ!  
じゅぽ!

ぐりっ!  
ぐりっ!  
ぐりっ!!

あ! あ! 毒島さんの  
おちんぽっ!  
すごい  
良いです  
うっ!!!



「どっちだ！寧々っ！」

「はううううっ…毒島さんの  
セックスが良いですっ！  
毒島さんのセックス  
すごくてえ…はううう！」

寧々の告白と同時に  
毒島は射精する。

「ふへえっ♡よく言ったねえ寧々♡  
嬉しくて精子もいっぱい  
出るよおお♡ビクビクするよお♡」

「ああっ！はあああ  
あああああ～っ！！」

毒島さんのセックス、良いですっ！

あぁあぁあぁっ！！

びゅるっ！  
びゅるるるっ

びゅるるるっ！！

どてびゅ  
どてびゅっ！



「ああ〜♡出た出た♡寧々まんこは  
本当にあったかくて締りがよくて  
気ン持ちいいなあああ〜♡」

「うっ…うっ…  
こんな…おトイレでまで…」

「ほらほら♡まんこ気持ちよくて  
こんなに出了よ♡あはあ♡  
大好きだよおお〜♡寧々♡」

「うっ…ああ…あ…！  
気持ちいいっ…あうっ」

ぬぼっ♡

びゅる、  
びゅる

びゅる♡

あっ!! あ…  
ひゅっ!  
あっ!  
気持ちいいっ!!



箱根旅行は想定外のことが  
何度も起こりながらも終了した。  
寧々と××は箱根から戻り、  
新と○の駅で別れる。

××は、寧々と思うようにデート出来なかったことに  
違和感と不信感を感じていた。

が、別れた後に寧々が追いかけてきて  
キスしてくれた辺りで、  
とりあえずこの日は気にするのをやめた。



午後9時半。

と〇の市。寧々の自宅近くの公園。

寧々は毒島の車の中にいた。





まっ…まだ…まだ続いでる  
なんて…！はうっ！ああ！

そうだよ♡じゃあ旅行の最後に  
ハッキリさせておこう♡

寧々の心の中を  
僕がどのくらい  
占めているのかっ♡

毒島さんの事は  
好きじゃないです…！  
××君が一番…  
100%好きっ…ひいつ

70  
70

LO  
LO

4キュッ

乳首うめええっ！！  
それ計算おかしくない？  
ちんぽもセックスも僕の方が  
良いのに彼氏が100%？

だってさ、僕の魅力なんて  
ちんこのデカさとセックスの技  
知ってることが大半だよ？

だからそれを認めた  
時点で寧ろはもう  
僕の事半分は好きだよな。

ど…どういう理屈  
ですかあ…それ…

それに僕の事は  
もう”嫌いではない”  
んだよねっ？

す…好きじゃ  
ないですっ！

でも  
”嫌いじゃない”  
んだよね？

ぬち、  
ぬち、

ドスッ  
ドチュッ

くちゅ

くちゅ

……………ああんっ！  
そこ…っ…！  
だっ、めえええ…！

嫌いじゃないよね？  
じゃあいよいよ30%は僕が  
寧々の心を占めてるねっ！

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

グリ♡  
グリ♡  
グニッ♡

そっ…そんなにい…  
占めてないですっ

じゃあハッキリさせよう。  
こんな気持ちいいセックス  
してくれるのは誰なの？

こんな気持ち良い  
ちんぽは誰のちんぽ？

ここまで届くのは  
誰のちんぽだっ!?

フリン  
フリン♡


グリッ!

グリッ!

グリッ!  
グイッ!

キリッ!

ひあつ、ああああつ、  
ぶつ、毒島さんの  
おちんぽですうっ!!



こんなに気持ちいい  
セックスを1日に  
何回も出来るのは誰っ!?

あああああっ、  
毒島さんですう!

こんなっ、奥でっ、  
射精出来るのは誰だっ！

あああああっ、  
毒島さんですう！

そうだっ寧々、出すぞ！  
最奥で射精するぞお！

んあっ、ああああ、  
一番奥だめえっ！  
気持ち良すぎるのおおお！

ドス！

ドス！

ちゅわ  
ちゅわ♡♡

ドス！！

ドチュッ！

ドス！

ほらほら！一番奥で  
出てるぞ！奥のここ  
だよなあああ！

ひあうううんっ！  
そこっ、そこおおお！  
ああっ、あああああ！

びゅるっ！

びゅるるる！

びゅるっ！！

どしまっ  
どしまっ

どしまっ！！

あっ！！あぁあぁあぁ

こんな最奥で  
ビクビク出来るちんぽは  
誰のだ？好きだろ？  
このちんぽっ！



はうっ…ああああ…  
好きですう…この  
おちんちん好きい…

僕とのセックス  
好きだろ？彼氏よりも!!

毒島さんのセックス…  
はうう…すごくてえ…

毒島さんとのセックスは…  
好きかもお…セックスは  
好きかも…あううう!

~~~~ツツツ!!

ぎゅん~~~~!!

びく  
びく

乳首エロっ♡まあいや  
25%くらいは寧々の心を  
占められたな♡

いっそ僕の事、好きに  
なったらもっとセックス  
気持ち良くなるのに♡

なっ…ならないです…  
あなたの事を  
好きになんて… キスも嫌っ…!

絶対惚れさせて  
あげるよ♡寧々から  
キスもさせるし  
いつか中出しもね…

ガキ  
ガキ…

ぬぷ  
ぬぷ…♡

絶対に  
そんな事…  
しないで…  
はうっ!

午後11時30分。

結局彼と旅行を終えた後、2時間も毒島とセックスしてしまった、させられてしまった寧々。

助手席はいよいよ噴出した愛液でぐしょぐしょに濡れている。

「ん…うう…」

衣服を整えて後部座席に移る寧々。  
エンジンを掛ける毒島。

「じゃあ家まで送るよ。

いや～最高のハネムーンだったね。」

寧々は体を横にすると、そのまま意識のまどろみの中へ。気がつくとき、もう家の近くに車は到着していた。

「着いたよ」

「…ありがとうございます」



「絶対、好きにさせてみせるよ。  
寧々の心を50%以上僕が占めてあげるからね。  
今度は本当のハネムーンに行こうね。」

「…あなたの事は好きになりませんからっ」

「…大好きだよ、寧々。」  
「……さようなら。」

寧々は家の玄関へ向かう。だが歩く途中、  
太ももが擦れるだけで快感を感じ、びくりと  
下半身が震えて揺れ、足元がおぼつかなくなる。

しかし寧々は玄関にたどり着き、  
玄関のドアを閉めた。

毒島は車の中で不気味に微笑み、  
ペニスをもた勃起させる。



寧々の部屋。

さすがに疲労で寧々はベッドに倒れこんだ。

汗と下腹部から漂う愛液の匂い、  
毒島の体臭などなど、隠せないセックスの匂いが  
気になるが風呂に入る体力がない。

寧々はそのまま眠りについた。

**「絶対、好きにさせてみせるよ。」**

毒島の言葉が頭に響く。  
寧々は行く末に不安を覚えながら、  
夢の中へ落ちていった。

## 寝取られネネさん その3 完

(その4につづく、全6部)



あっ、はあああああっ、4  
9%っ、49%くらいっ、  
ひいっ、好きですううう！

中に出すなんて  
一番だめっ…  
妊娠しちゃう…

寧々！出すぞ！本当に出していいんだな？！

良いよね?!?!中に出すよ？赤ちゃんつくるよ?!

ひっひいひいひいイクうっイクっ！  
またイクうううっ！  
毒島さん凄いいいひい！

中出し

次回、膣内射精解禁。

だっ、めええ、生でしたら妊娠しちゃう…！

ああ♡寧々っ♡多分今日から危険日だよなっ！

今日から5、6日間、妊娠確実期間だよな♡

はあっ、あああああ！出る！出る！出るよお！  
もう本当に生で精子出るよお！  
寧々のまんこに！！子宮に！！！

やばっ、出る、出る！

私、全然妊娠なんて心の準備がっ

寝取られ  
ネネさん その 4

ああ♡毒島さんっ♡あああ！

素敵！いっぱい気持ちよくしてえ♡

ああああ！出る！出るよ！本当にもう出る！

大好きな寧々の子宮に直接出るよ！

2020年12月頃配信開始予定！